

32-420

新譯

フエマス物語

織戸正満譯

東京

日進堂藏版

全

明治
40 0 1
丙午

序

英語は廣い意味の世界語である。何人も此語學に通ずる時は或は書齋の裡に歐米の文化を求め或は世界を漫遊するに、何等の不便を感せぬのである。方今我邦に於ける此語學研究の隆盛を見る。眞に其故である。

古諺に「鹿を追ふ獵師は山を見ず」と云ふことがある。其目的とする所を急追するものは専心其求むる所に注目して奮進する結果。意外の蹉跌を招く事往々にして存するを論めた言であるが此語は一般究學の徒に偉大なる教訓を與ふるものである。

由來人は其追求する所、其研鑽する所に同化され易いものであるが此例は特に文學的方面に於て顯著である。往昔漢學の隆盛を持した時代を觀るに支那崇拜の風潮は我神州に横溢した、彼を稱して中華國華人とし自らは倭國東方野蠻の夷と云ひ、甚しきに至つては其氏名をさへ彼に倣つて改めた腐儒の輩を澎々として見たのであ

る。苦しんで之れを古往に探るに及ばぬ、現に明治の初期にあつては如何。歐米諸國を呼んで泰西各國と稱し、時流の末に至る迄總て彼等の鑿に倣ふて意氣得々たる輕薄者流を出し「舶來」とは「良品」「高價」の異名たるは、今日に及んでも未だ消滅せざる有様ではないか。

即ち之等の腐儒輕薄者流は、其學ぶものに魅了せられて遂に其本義を失つた「學問の空囊」に過ぎぬ。鹿を追ふて徒らに急なる爲め谿川に墜落して溺れたる獵師と一般なのである。

自分の懼るゝ所は實に此點にある。駭々たる研學の潮流は邦家の爲に甚だ慶賀に堪えぬ事ではあるが、周密なる用意を欠く爲めに徒らに功を早くのあまり、少年子弟をして夫の「學問の空囊」溺れたる獵師たらしむる事なきや、まことに寒心に堪えぬのである。茲に於て年少者が日常其師友とする教科書の撰擇の必要が生ずるので其良否は、夫の年少者の將來を決し進んでは國民性格の良否に及び、以て國家百年の消長にも關するに到るのである。

自分は如上の標準に依つて目下中學校用として行わるゝ英文教科書を通覽し漸く會心のもの一冊を得た、曰く、ポルドウ[#]ン著、フェーマスストーリー。

此書たる行文平易流暢、其内容とする所は豪壯、優美、壯烈、悲痛、或は濃艶、或は瀟灑、或は秋霜烈日の意氣あり、或は春和陽蕩の温情あり、而して時に洒落たる滑稽の中に辛辣なる諷刺を寓する等、所謂談笑の間天下の大道を説くの目あり、即ち日夜之に學ぶ、青年子女は不知の間に西洋古今の偉人傑士、烈女節婦の行爲を見冥々の裡に其偉大を感得するに至り、我固有なる大和魂は、愈々純化して遂に尺璧微瑕なきに及び彼等の將來をして善良なる人士たらしむるのみならず延いては帝國々民として光輝あるものならしめん。

之れ今回自分が之を譯す所以であるので一は以て青年諸子の研究に便し一は以て其品性修養の資に供するのである。翻譯の目的の一般が既に参考書とするにあるから譯文は力めて原文を離れざる事を旨とし更に難解の句、熟語等の場合は之れを抽出して註解を附したのである。故に青年諸子にして本書を坐右に備へて原文を讀み

難解の文に際して之に依る時は單簡明快なる答案を得る當に彼の指南車の人をよく導く類には止まらぬ事を信するのである。

世上往々此種の書を非難するものあるを耳にするが之等は實に時間と勞力との問題を度外視したる愚論である。今日の學生は寧ろ其課程の過多なるに苦しんで居る彼等にとつては勞力と時間の節約は實に重要な問題である。註解書は即ち此問題を解決する使命を有するもの眞に彼等の舟筏である。自分は今日の學生の狀態に照して到底彼等の非難に傾應する能わざるものである。

明治四十二年中夏

牛込の寓居に於て

織戸正滿

新譯 フェマス物語目次

第一章	アルフレッド王と菓子	一
第二章	アルフレッド王と乞食	四
第三章	海岸のカニユート王	八
第四章	征服者ウヰリアムが王子	一二
第五章	白船	一八
第六章	國王ジョンと方丈	二四
第七章	ロビンフッドの話	三三
第八章	フルースと蜘蛛	四〇
第九章	黒ダクラス	四三
第十章	ゴサムの三人	四七

第十一章 ゴーザンの他の智恵者……………五〇

第十二章 デイーの水車小屋……………五七

第十三章 サー、フキリップシドニー……………六〇

第十四章 恩知らずの兵士……………六三

第十五章 サー、ハンブレー、ギルバルト物語……………六五

第十六章 サー、ウオルターレーイー……………六七

第十七章 ポカホントス……………七三

第十八章 ジョージ、ワシントンと彼の手斧……………七五

第十九章 グレースターリング……………七七

第二十章 ウイリアム、テル物語……………八一

第二十一章 アーノルド、ウインケルライド……………八四

第二十二章 アトリーの鐘……………八八

第二十三章 如何にしてナポレオンガアルプス山を越へたか……………九六

第二十四章 シンシナッチの話……………九八

第二十五章 レギュラス物語……………一〇四

第二十六章 コルネリアの寶石……………一〇九

第二十七章 アンドロークラスと獅子……………一一三

第二十八章 橋に於けるホラテイウス……………一一七

第二十九章 ジュリアス、シイサー……………一二二

第三十章 ダモクルスと劍……………一二五

第三十一章 ダモンとフ井シアス……………一三〇

第三十二章 ラコニツクの答……………一三四

第三十三章 恩知らずの客……………一三五

第三十四章 アレキサンダーとバセファラス……………一三八

第三十五章 賢人デオゼンス……………一四一

第三十六章 勇敢なる三百人……………一四三

5
新
フエ
マス
物語目次
終

第五十章 ミーニオン……………二一三

第三十七章 リクラテスと其家……………一四六
第三十八章 王と其應……………一四七
第三十九章 お醫者のゴールドスミス……………一五三
第四十章 王國……………一五五
第四十一章 パーメサイドと饗應……………一五九
第四十二章 終りなき話……………一六五
第四十三章 盲人と象……………一七〇
第四十四章 マキシミリアンと鴉烏番人……………一七二
第四十五章 インチーケーフ岩……………一七九
第四十六章 ウ井ツチントンと其猫……………一八三
第四十七章 カサビアンカ……………一九八
第四十八章 アントニオ、カノーバ……………二〇一
第四十九章 ビシララ……………二〇七

註 譯

フエマス、ストリー

第一章

アルフレッド王と菓子

昔英國に、アルフレッドと呼ばれたる聰明、善良なる國王があつた。凡そ今日までに、彼ほど多く彼の祖國の爲に盡した人とは無く、今日全世界の人は、彼をば、アルフレッド大王と呼び倣してゐる。

當時（西曆紀元八九百年代即ちアルフレッド時代）にありては、國王の日常も決して氣樂のものにあらず、戦争は常に斷えず、殊に、ア王ほど、よく其軍隊を戰場に導いた人は無かつた。そんな譯からして、

ポールドウソン原著

織戸正満註譯

all over the world. 全世界中。
a busy time of it.....it は別に意味なし。

統治と戦闘との間に身を處したア王は、實に忙しいものであつた。

デーン人と稱する猛烈粗野な民衆が、之より以前、海を渡り來て、英人と戦ひ、其數の巨多なる、其勇敢、強力なる、遂に永い間、一度の戦にも破れなかつた位で、若し其儘に進んだものなら、彼等デーン人は直に全國（英國）の統治者となつたに相違ない。

大激戦の後、遂に英軍は敗れて、四散し、各人何れも出來得る限り最善の法を執つて、身を免れざるを得なかつた。ア王は只一人、急ぎに急いで、森や沼地の中を遁れ去つた。

其日遅くア王は、さる伐木者の小屋に達したが、疲勞も饑も烈しかつたので、伐木者のお神さんに、何か喰べるものはないか、どうか小屋の中に睡らしてくれよと頼んだ。

お神さんは爐邊で菓子焼いてゐたが、此憐なる、ボロ／＼の衣物着けたる者の餓えたる様を可哀相に眺めた。お神さんは此男が國王だ

とは夢にも思はなかつたのである。

「ようござんすよ。此お菓子の番をして下さいな。そしたら晩御飯は上げますよ。妾はこれから出かけて、牛乳を搾つて來なきやならないんですから、お前さんは其間に、此菓子が燃えないやうに氣を注げて下さらなきや……」とお神さんが云つた。

ア王は喜んで菓子の番をした。併し思ひ出せば、色々の事が胸に浮んで來る。どうしたら再び軍隊を集めることが出来るか知らん。どうしたら、あの猛烈なデーン人を國外に追ふことか出来るか知らん。と斯んな事をのみ考へて、彼は饑餓を忘れ、自分の伐木者の家にある事をも忘れ、只明日の計畫を作るにのみ忙がしかつた。

暫くして婦人が歸つて來た。所が菓子が爐の上で、燻つてゐる。コゲて碎けさうになつて居る。さあ、お神さんの怒り様と云つたら！

「此怠け野郎奴！さあよくお前さんの仕たことを御覽な！お前さんは

from over the sea, 海の彼方から。
gained every battle, 何の戦争にも勝つた。
kept on, 繼續した。
broken up, 丸で敗られた。

何か喰べたいと云つたぢやないか。それに働くのが嫌だね！」と彼女は叫んだ。

お神さんは杖で以て、王様を打つたことも傳へられてゐる。併し其女が左程悪性者とも信じられない。

斯様に罵られて王様は嘸、自身で可笑しく思はれたに相違ない。飢え切つた王様は、婦人の怒れる言葉をば、無くなつた菓子の半分程も氣にかけられはしなかつた。

其晩王様が何か喰べられたかどうだか。晩食を喰べないで睡なきやならなかつたかどうだか、私は知らない。併し其後久しからずして、彼は再び、其部下の兵を集め、大激戦に於てデーン人を敗つた。

第二章

アルフレツト王と乞食

或時デーン人は、アルフレツト王をば其王國より逐うたそれで王は或川の中の小島に永い間、隠れなきやならなかつた。

一口此島中の人凡て、只國王、女王及其下僕を除く外、盡く漁獵に出かけた、其島は極もの寂しい所で、誰だつてボートに乗つてでなければ茲に至るを得なかつた。所が正午頃になつて、ボロ衣物を着けた乞食が、王の棲家の戸口にやつて來て食を乞うた。

國王は下僕を呼び、今幾程の食糧が屋内にあるかを尋ねた。下僕は「主よ。只パンの一塊と、少許の葡萄酒ばかりに候」と告げた。

そこで王は、神に感謝して曰く、

「パンの塊の半分、葡萄酒の半分为、其憐な男に與へよ」

下僕は命せられたる通にした。乞食は、王に其親切を謝して道を進

At onetime, once,
My lord, milord さよむ。

ill-natured 性質惡し。
laughed to himself at the thought of, 斯う思つて獨り笑つた。
half so much as the loss,....[I half of the loss.....の如き意。

んだ。

晝過ぎて、漁獵に出かけた人々は歸つて來た、見れば、三艘のボートには魚を満載し、そして漁夫の云ふには、

「此島に來て以來、今日程大獵のあつた日はなかつた。」

國王は非常に喜ばれ、臣下と共に嘗てない幸福を覺えられた。

夜になつて王は永い間、眼さめながら横になり、其日起つた事どもを考へられた。そして遂に何だか太陽の如き大きな光を認めた様に思はれたが、其光の只中には、黒い毛髪を頂き手に披いた書物を持つてゐる一老人が立て居た。

此は皆夢であつたらう。併し王には事實をしか思はれなかつた。で彼は、其老人を眺め、審かつた。併し怖れはしなかつた。彼は其老人に

「あなたは、何誰ですか」と尋ねた。すると老人が、

「我子アルフレッドよ。怖るゝ勿れ。予は、今日御身よりお身の有てるパン塊の半分を貰ひし者なり。心を強くし、楽しくし、予の云ふ所に耳傾けよ。朝早く起き出でて、汝のラツバをば、デーン人の聞き附くる程、聲高に三回吹くべし、九時までには、五百の人間、汝の周圍にあるべく、汝は此を戰場に導くを得べし。怖るゝ勿れ、只進め。七日にして汝の敵は敗れ、汝は汝の王國に歸り、平和に之を治むるを得べし。」

と云うた。

かくて光は消え、其男の姿は最早、見られなかつた。

翌朝王は夙に起き出で、本土に渡り、ラツバを三回、聲高に吹いた此音を耳にした彼の友人は喜んだが、デーン人は恐怖の念に満され

た。

九時頃に彼の最勇敢なる兵士五百は戦の準備をして彼の周囲に集り、そこで彼は夢の中で見たり聞いたりした事を彼等に告げた所が、其話が終ると共に兵士は大喝采をなし、力の有らん限り彼に附随して戦はうと云つた。

斯くて彼等は勇しく戦場に赴き、デーン人を敗り、彼等を古巣に逐ひ返し、アルフレッド王は其後、世を終るまで、其全國民をば、賢く良く統治した。

第三章

海岸のカニユート王

アルフレッド大王の後百年、或は其以上にして、カニユートと呼ばれたる英王があつた。カニユート王は、デーン人であつた。併し此デ

ーン人は嘗てアルフレッド大王と戦つた當時の如く猛烈の者でもなければ、惨酷のものでもなかつた。

カニユートの周囲にある偉人達とか、士官連は常に彼を賞めた。

一人が

「御身は嘗て無き最大偉人なり」

といへば、他の一人は、

「大カニユートよ。世界廣しと雖も、汝に背くもの一も、有るなし。」
といつた。

此王は非常に聰明であつたから、コンナ詰らない話を耳にすることに倦んじて居た。

一日彼は海岸にあつた。士官も共にありて、何時もの様に彼を讃めた。そこで王は、今日こそ彼等に教ふべき時であるとなし、自己の椅子を水際近く置く事を命せられた。そして問はるゝに、

「予は世界中の最大偉人なりや」
すると一同は、

「あゝ我君よ、我君の如く偉大なるはなし」

と叫んだ。彼は再び、

「凡てのもの皆予が命に従ふべきか」

と尋ねた。

「我君よ敢て我君の命に背くものなかるべし。世界は我君の前に屈し、我君に名譽を捧ぐべし」

と彼等は答へた。

「海も亦、予に従ふならんか」

と云ひて王は、足下に砂を舐むる小波を見下した。

愚なる士官連は狼狽した。併し「否」と答へ得なかつた。

「我君よ、命じ給へ、そは従はん」

と一人が答へた。

カニユート王叫んで曰く

「海よ、汝は更に近く我方に来る可らず。波よ汝の轉々を止めよ。而して我足に敢て觸るゝ勿れ」
と。

併し潮は常の如く進み、水は次第に高まり、遂には王の椅子の周邊まで來たり、只彼の足を濕ほしたのみならず彼の衣裳をも濕した。士官連は驚いて、若しや王が發狂せられたのではないかと審りながら、王の周圍に立つた。

そこでカニユート王は其王冠を脱ぎ去つて、砂上に投げ付け、

「予は再び此を頂かざるべし。我部下のものよ。汝等は、今日見し所より學ぶ所あれ。萬能の王は只一人のみ。そは海を司配し、大洋をば其の手の平に保つ者なり。何事を差し置きても、賞讃すべく、仕へま

つるべきものなり」
と。

第四章

征服者ウヰリヤムが三子

嘗て英國にウヰリヤムと云ふ賢君があつた。(佛國より渡つて英國を征服した王であるから、征服者ウヰリアムとも云ふ。)王に三人の子供があつた。

一日王は物思に沈んで憂慮に堪へぬもののやうであつた。御側の人々は、何事かと御尋ね申した。王は、

「我が無き後の我子等は、抑何事をなすかと其を慮ふるなり。彼等若し、賢にして強なるに非んば、折角彼等の爲に我が得たる此土も保ち難し。我なき跡は、三子の何れが王たるべきと、殆んど思ひ迷ふなり」

と。

人々申す、

「我君。御子達の最も敬愛し給ふ所を知るを得ば、御人柄の程も知り得べく候。各御子達に問を設けたらば、或は、陛下に代りて此王國をしるしめすに、何れの君の最も適し給ふかを知るを得候ふべきか。」

「左なり。其議誠に甲斐あるべし。然らば、子等を卿が許に、越させ、何なりとも尋ねよ。」

人々は少時互に相談したが、やがて議一決して、親王方を一度に一人宛招き申して、各々同様の問を申し上げやうといふ事になつた。

第一に其室に來たのは、ロバートであつた。彼は、丈高い、意志の強い青年で、綽名をショートストックキングと云はれて居た。

人々の内から、一人が云つた、

「若君様、此問に答へ給はれ。若し男子たらずして、鳥たる事が、神

find out.....事柄を見出す事。
in your place, 代りに。
Have the boys come, 來させよ。
what you please, 思ふまい何でも。
willful (is full of will) なり
Short Stocking は背高き爲靴下短くて困る所より出でしならん
Fair sir, 美しい君。

William, - Normandy 公 (1027-1087). 1066 年英國の王位に即く
I am at a loss, - I am puzzled.

の御意に叶ふとせば、若君様には、如何なる鳥にならんと願はせ給ふや。」

「鷹よ。我は鷹たらんことを願はしけれ。何鳥も鷹の如く吾人をして、剛勇壯美なる武士を忍ばしむるもの無ければなり。」

とロバートは答へた。
次に來たのは、少年ウキリアム。父王と同名だけあつて、父の寵愛深い兒である。彼の顔は愉快げに暢々として、圓い。又其髪の赤い爲に綽名をルーファスとかレッドなどと呼ばれた。

「若君様。此問に答へ給はれ。若し男子たらずして、鳥たる事が、神の御意に叶ふとせば、若君様には、如何なる鳥にならんと願はせ給ふや。」

「鷹よ。我は鷹たらんことを願はしけれ。鷹は強くして勇しければなり。鷹は萬鳥の均しく畏怖する所なれば則ち鷹は萬鳥の王者なり。」

最後に末子ヘンリーが來た。其歩調は靜肅で、其容子は眞率思慮に満ちて居た。彼は夙に讀書に稽ひ、爲にボークラークとかハンサムスカラーとか綽名されて居た。

件の賢臣曰く、

「若君様。此問に答へ給はれ。若し男子たらずして、鳥たる事が、神の御意に叶ふとせば、若君様には、如何なる鳥にならんと願はせ給ふや。」

ヘンリー答へて、

「掠鳥ぞ。我は掠鳥たることを願はしけれ。掠鳥は、舉止寛雅、親切にして見る人をして樂ましめ、未だ曾て隣人の物を掠め又は此を虐待せんとしたる事あらざればなり。」

茲に於て人人は、凝議する事暫くにして、何事が決する所あり、や

Beauclerc, は Beau 即ち華美な雅な男。clerc 即ち clerk 即ち僧官を合せたるなるべし。

Handsome Scholar, は立派な學者なり。

good manner, は gentleman の教育に於てやましき問題なり。

to rob its neighbour, 此の次に of something あるものとして讀むべし。to rob me of my money の如し。

remind one of, 人をして……を思ひ起さしむ。

name-sake, 成人の名を貰うて其人にあやかる様命名する事。隨て同名の事。

Rufus, は Rufous にて褐赤の意。

Red, も同様。

look, は appearance. 態度容子。

がて王に奏上する事になつた。

奏上して曰く、

「臣等知り侍りぬ御長子ロバート君は剛勇壯美に成りまさん、大なる働をなして身に高名を得たまふべしと雖も、遂には敵に破られ、牢獄の内に最後をこげ給はん。

「次の御子ウキリアム君は、例へば荒鷲の如く勇しく強く成りまさん。然れども、彼君は粗暴の振舞多くして、爲に怖れられ憎まれ給ふべく、一生を無慚に送り、死して辱多き事に候ふべし。

「御末子ヘンリー君は、賢明に、謹嚴に、温和に成りまさん。彼君は敵迫りて萬止むなき時のみ軍を動かし給ふべし、されば、内には愛せられ、外には敬せられ、多くの領地を獲て後、靜に冥し給ふ事に候はん。」

と。

此の事も今は昔と歳移つて、三王子は成人した。ウキリアム王は今や臨終の床に横つて、又、己が無き後に、三子の如何になり行く事かと考へた。で其昔、賢臣共が申した事を思ひ出して、ロバートには佛蘭西に有した領土を與へ、ウキリアムには英蘭土の王たらしめ、而してヘンリーには方寸の土地も與へず只一箇の金を取らせよと仰せ出された。

斯くして遂に賢臣共が豫言した所と似た事が起つた。即ち、ロバートのショートストッキンギは、剛膽にして小節を顧みず、無鐵砲なる事其崇敬する鷹をつくり、彼は折角父が残した領土を悉皆無くしてつて、遂に牢に閉込められて餘生を送つた。

ウキリアムのルーファスは、専横暴虐、國民皆彼を恐れ憎むに至り一生を殘戾の内に送りたる結果は、山に狩する間に其の近臣の爲に弑せられて了つた。

grown up to be men, は生長して人に成つた。にして人になるべく生長した。に非ず。 to be men は即ち結果なり。
become of, は happen to なり。
Robert should have, は王の will を以て左右する事をあらはす shall の過去。
his own men, his attendants while hunting, は he was を入れて見るべし。

with one another, 御互に。
among themselves, 彼等同士の間だけで。
a name for himself, 只一身に関する名。
in the end, は after all, 即ち結局。
for his cruel deeds, for は爲にの意。
to lead a life, 一代暮す。
to die a death, 死方をする。
is forced to, is compelled to.

所でヘンリー即ちハンサムスカラーは、件の金篋を確かに所有して居たばかりでなく、間もなく英蘭土の王となり、嘗て父ウキリアム王が佛蘭西で領して居た土地をも司配する様になつて了つたのである。

第五章

白船

ハンサムスカラーと謳はれたヘンリー王に、一子あり名づけてウキリアムといふ、王の寵愛措かざる所、王子氣品あり勇氣あり、何人も何時かは、彼立つて英王となる事だらうと望み思はぬものはなかつた。或年の夏、ウキリアム王子は、佛蘭西なる領土巡視の爲、父に従つて出掛けた。到れば、四民の熱烈なる歓迎を受ける、王子は壯美にして親切、見る人皆、彼に愛を捧ぐるといふ程であつた。

が、英蘭土に歸るべき時は遂に來た。王は、國務大臣や侍衛の武士

by and by, は pretty soon, 程なく。なり。やがて。にあらず。
some day, は some day or other, にて何時か。なり。
look after, は take care of. なり。

と共に、朝早く出帆をせられた、けれども王子ウキリアムは、少壯の友達と暫し出發を見合せた。王子等には今度の佛蘭西旅行は非常に樂しかつた爲に、遽に離別し去るに忍びなかつたのである。

やがて彼等は待つて居た船に乗り込んだ。其船は、白帆に白檣はしらの美しいので、此の航海の爲に特別に艦装せられたものであつた。

海は靜かに風は穩かで、誰も危険を思ふ者はなかつた。船中何物も皆此航海を慰むる様にしてあつた。音楽あり舞踏あり、一人として樂しげに歡ばぬものは無かつた。

白翼張つた此の船が灣を出離れぬ前にもう日は沒した。けれ共、日沒何するもぞ。月は満ちて耿々、船路を照らして充分明い。明日は、曉前に此水道を過る事が出來よう。茲に於て、王子を始め供奉の若者共何れも歡樂酒宴に我を忘れてゐた。

夜は更けた。突然、甲板上「大變ッ」と叫ぶ聲あり。瞬く間もなく

were in no great haste to, は were not in a great haste to, なり。
set sail, 出帆す。
went on board of the ship, of を取り去つてもよし。
on purpose, 懸々。
fitted up for, 爲に準備す。
fairly, pretty, gave themselves up to, 事に耽つて餘念なきをいふ。

砕くる物音。船は岩にぶつかつたのだ。水はドットと流れ込む。船は沈み行く。嗚呼、唯の今まで、萬事を忘れて歡樂盡し、彼等、今や何處？

誰の心も恐怖に満ちた。誰一人途方に暮れぬものはない。小船は直に下されて、王子は屈強の武士二三人と此に跳り込んだ一棹ぐつと突出す時、親船は水を被つて沈没し始めた。後等は助かるべきか。

親船から、ものゝ五間も漕いだかといふ時、取り残された人の中に呼ぶ聲あり。

「漕ぎ戻せ。妹だ。助けにやならん」

と王子は叫んだ。

人々は否まうとはしなかつた。小船は再び、沈み行く親船の舷に持ち來たされた。王子は立ち上つて、妹を受取らうとして兩腕を差伸ばした。此時遅く彼時早く、親船は、グランと前に傾いて波の中に「あ

earlier hours は昔の口なり。

alarm, は alarm bell など用ゐて。警戒する如き驚なり。

heart-free, tree-hearted なり

れッ」と身を切る恐しい一聲。後は天地寂寥、只咽ぶ水の響のみ、親船に小船、王子に王女、佛蘭西を出た盛んな一行、共に海底に葬られ去りぬ、唯一人あり、板子一枚に縋り、漂ひ漂うて翌日助かつた此男の外、又生きて此悲惨を語るものがなかつたのである。

ヘンリー王、王子の死を聞き給ひて、滅入るばかりに悲しみ給ひき。王の心は深手を負うた。王も生きて最早樂が無かつた。此後王の笑顔を見た人は無いといふ事である。

彼に再び突顔なし。

一、太子を載せたる帆船は沈みぬ。

逆捲く浪は覆ひ來ぬ。

子を泣く彼には王位も何かは。

生くるひまこそ、ものうけれ。

悲哀が命の綱切る前の

And what was England's子を失ひし王には王位もうれしくない生さへも苦境である。

He lived, 死を望めども尙止むなく生き長へた。

cha in, はtieとしても同意。

王は演武の勇士が馬場に
 花冠受くるを近く見き。
 されど無息の淵の嘯きは
 樂の音ごとに、交來りて
 不眠の風の聲さへ聞ゆ。
 彼に再び笑顔なし。
 昔好んで誓いし遺品かたみに
 思ひかくるも、今多し。
 幾多樂しき馳走の前に
 他人の坐して、縁者無し。
 眞の愛の涙を、ぎし
 墳墓は、白き雨に委し、
 唯來ん年に、希望のぞみをかけつ

festal bowls went round. 節會の舞踏が進行しつゝある。
 minstrel, 伶人。
 tourney, 單騎紅白勝負といった様のもの
 ring, 演武場。
 A mur mur.....は王の心中海の音風の響の往來するこゝを云ふ。
 hearts closed over, 人の心の集りしこゝ。
 trace of vows, 讓るさ約した遺品即領地。
 the kins-man, 王子を指す。
 board, table なり
 for other years, 未來をうけて。

長きがまゝに彼生きぬ。
 など悲しむ者に死の來ぬか。
 彼に再び笑顔なし。
 二、玉座の前には、莊嚴勇武の
 威儀繕へる百官立てり。
 さはいへ、魚腹に葬られたる
 人の椅子をば、誰れ満たし得ん。
 みやび男共の、盡きぬ快樂けらくに
 耽りて、王の前に舞ふ。
 されど、逆浪に悶ゆる王子見ゆ。
 彼に再び笑顔なし。
 三、王は節會の舞の筵に坐りき。
 王は樂手の歌、聴きよ。

forms, つまり officers の意。
 the place of one, 次の行は此を説明す。
 the young and fair, 青年 In pleasure's reckless train, (In a train(列を
 なして) pursuing reckless pleasure (思慮もなく快樂を追うて)。
 But seas dashed.....は眼前宮中の莊觀あれども王の心は悲しき海の出事の
 み往來するなり。

彼に再び笑顔なし。

ヒーマンス夫人作。

第六章

國王ジョンと方丈

一、三個の問題

嘗て英國にジョンといふ王があつた。彼は暴君で、民に對する峻酷殘忍であつて、己が意に叶ふ以上は他人は如何にならうと構はないといつた風。極惡非道古往今來、此程の王は、英國に無かつた。

扱て、茲に所は後のカンタベリーの町に、富裕の老方丈があつて、彼の精舎と稱する豪氣な家に、素晴らしい生活をして居た、日毎、正餐の膳に着く貴族一百人。侍ふ勇武の士五十人、何れも綺麗な天鵝絨の上衣に、金の鎖繻絆といふ服装。

ジョン王此方丈の生活を耳にした時、此奴一つ禁じてやらうと腹を据ゑた。そこで此老爺の所に使を遣つて、出頭拜謁させようとした。

王曰く、

「あいや、方丈。お前は、乃公よりも遙かに良い家を持つて居るさうだが。如何すれや、其様な虫の良い事が出来るか。お前は、よもや、天下一人として國王以上に生活する事はならぬ位の事は、知らぬのもあるまい。乃公は、何人にも此を許さぬぞ。」

「王様。申し上げます。私は、自分の所有以外に何も費して居ませぬ、何卒、私が友達や勇士の爲に歡樂を盡したからとて、私を悪んで下さいませぬ様に御願申します。」

と、方丈が云つた。

「お前を惡むと。お前を惡まずに居られるか。此廣い王土にあるものは皆、當然乃公のものだ。どうすりや乃公より立派な暮をして乃公に

put a stop to, は to prohibit, 禁する。

send for, 人を呼びにやる事。

How now, は Interjection 也。

How dare you do, 如何すればそんな事が出来る。

think ill of me, 悪く思ふ。

I can not help but, ……すにはぬられない。

so long as, は if に近し。

have his own way, 勝手に利く。

wait upon, は to attend.

made up his mind, は decided.

辱搔かせようナンとするのか。人は、お前が乃公の位を覘つてゐると思ふだらう。」

「イヤ、御串談は御免蒙ります。一體私は——」

「黙れ。何といつたつてお前が間違つてゐる。此の三つの問に答へられなきア、お前の頭は飛んで了ふ、御前の財産は没収だ。」

「御問に答へて見ますで御座います。王様。」

「よろしい。乃公は今かう、金冠を戴いて座つてゐるが、掛々乃公は何時まで壽命があるか、日まで細かに云へ。それから、乃公は何の位早く世界を一周する事が出来るか、云へ。最後に、乃公は何を考へてるか云はせる。」

「王様。其は深遠難解の問題で御座りますれば、即座には、御答へ仕り兼ねます。若し二週間、篤と考へまする御猶豫を下し置かれましたらば、出来る限りの事を致しまする。」

「ちや二週間遣る。けれ共其上句に答が出来んぞ、お前の頭無いぞ、お前の土地は乃公のものだぞ。」

方丈は悲み且恐れて退る。彼は第一に牛津カウンスフオトに馬を驅つた。御承知の通り、此所には、大な學校がある、大學といふ。方丈は此所の大先生方の内何誰かに會つて教を請はうと思つたのだ。が大先生方も頭を横に揮つて、ジョン王の事は何も書物には出てゐない旨を答へた。

そこで、方丈今度は、劍橋ケンブリッヂに乗り下つた。此所にも亦大學があるけれ共、此所の教授達も、方丈を助る事をし得なかつた。

百計盡きて、悄然洵に喪家の狗の如く、家路をさして乗り出した、もう彼の友にも士にも、袂別の詞を云はうとしてであつた。今や彼の命は、僅に一週間であつたからである。

二、三個の答案

方丈は馬を進ませて、今あの壯大な住家に行く小路にさしかゝつた

by right, (I rightly.
riches (I property.
to within a day just, —so exactly that a day is concerned.

時、野らに行きかけの羊飼に出會つた。

「お歸りでござりまするか、旦那様。ジョン大王の所の御用は何でござりましたか。」

と羊飼は叫ぶのであつた。

「何とも悲しい御用ぢや、悲しい御用ぢや。」

と云つて、方丈、都の一部始終を語つて聞せた。

羊飼の云ふには、

「御喜びなされ、御喜な下され、旦那様。あなたは、かう云ふ事を御聞きになつた事はござりませぬか。馬鹿も賢人に智恵を貸す事が無いでもないといふ事を。私は、あなたの御難儀が救はれる様に思ひます。」

「エツ私を助けて呉れるツ？如何して？如何して？」

「さア其でござりまする。お承知の通り、人は皆、私が旦那様に酷似だと申しまする。時々旦那様と間違へられまする。で、ごうか旦那様

which led to, に通ずる所の。
Wellcome home, 御歸なさい。
cheer up, は become glad.
wit, 機智頓智。
help you out of trouble, 危難の中に救ふ。
lend me etc., and etc. 命の次に來る and は then さか in that case の如く譯すればあたり

の御供人と御馬と御衣と貸して下され。さうすれば私は、都に上つて王様に御目通を致しまする。ごうも外に仕方が無い時には少くとも、旦那様の御身代りに死にまする。」

「あ、有難い爺さん。お前は、本統に本統に親切ぢや、ではお前の計を一つやつて貰ふさしよう。けれ共、若し事態益々危いといふ様なればお前に死なせはせぬ。私は自分に死ぬ。」
と方丈は云つた。

そこで、羊飼は即刻出掛ける事にした。彼は何かから何まで注意周到にした。羊飼の平生の着物の上に、方丈の長い御衣をはふつて、方丈の帽子を借り、金色の枕を借りた。萬端出来て見ると、廣い世界に誰一人、此を彼の上人其人でないと思はうとしても思はれないのであつた。それから、彼は方丈の馬に跨り、供人の盛な行列を率ゐて、都倫敦さしで出發した。

have a mind to, せんさ欲す。するに意あり。
worst comes to the worst, 益々悪くなる。
You shall not die, は I will not let you die. 死なせない。
dress himself with, は arm himself with. さ同じ。
gold, en 金製にあらず。金の様な。
in the world, 唯力を強むるのみ。

元より王も彼の本性を知らなかつた。

「やつて来たね、方丈サン、今かう歸つて来たとは、近頃結構至極ぢや。大變早いやうだが、だつても、乃公の三個の問題に答へ損ねたら首はないよ。」

「いや、もう大丈夫御答が出来ます、王様。」

と羊飼が云つた。

「成程、成程！」王は獨り笑つて「サアそれでは、乃公の第一問題を答へい。乃公は何時まで壽命があるか！サア日まで精確に話せい。」

「あなたの御壽命は」と羊飼は云ひ出した。「あなたの御過ぎなさる日までで、其より一日も長くはござりませぬ。して、あなたが最後の息を引取りなさる時に御過ぎになりまするので、其より一瞬間も早くはござりませぬ。」

王は笑つた。

「お前は頓智が利く様だ。けれ共、答は及第させようし、正しいと云はう。今度は、乃公は何の位早く世界を乗り周る事が出来るか、云つて見い。」

「あなたは、太陽と一緒に起きなさらねばなりません。」と羊飼は答へた。「而して、翌朝又太陽の出るまで乗るんでござりまする。かう仕なされば、あなたは二十四時間でもう世界一周をしたとお氣が着きませう。」

王は又笑つて、云つた。

「成程。乃公は、さう早く出来ると思はなんだ。お前は、頓智が利くばかりか、なかく、伶俐巧だ。此答も及第だ。そこで第三の最後の問題に成つた。乃公は何を考へてゐるか。」

「其は何でもない間でござります。あなたは、私がカンタヘリーの方丈だと考へておいでなされます。けれども、正直を申せば、私はホン

a good thing, (it ironically) に云へるなり。
prompt as you are, (it though you are prompt) なり。
to the very day, 其日まで精しく。
You shall live, 自然さいふ力が働いて死ぬ事になる心を含む。
in twenty-four hours, 二十四時間經て。

のつまらぬ羊飼で、今日は、方丈の爲、又私の爲に、王様の御赦免を願ひに参りましたる次第ござりまする。」と云つて、羊飼は、其の長い衣を脱ぎ捨てた。

王は腹を抱へて笑ひ崩る事ヤ、久し。

「お前は快男兒ぢや。旦那の代りに立つてカンタベリーの方丈になれ。」

と羊飼は云つた、

「王様。其はなりません。私は読み書が出来ませぬ。」

「宜しい、それでは、今日の愉快な諧謔わだかまの御禮に何か外の品を取らせう。お前の存命中は、毎週銀四片づゝを下げる。又里に歸つたらば、あの方丈にかう云つてよろしい。ジョン王から、自由にして良いといふ許を得て来た。」

と王は云つた。

第七章

ロビンフードの話

リチャードとかジョンとかいふ王のあの治らぬ時代には、英國には諸所に大森林が澤山あつた。中にも最も名高いのが、シャーウッドの森といつて、王が能く鹿狩をしに行つたものである、此の森には、野武士といふ向ふ見ずの連中が一團體をして住んで居つた。

彼等は、何か國法に背いた事をして、命を助からうとして止むを得ず此森に身を匿すに至つたものである。此所で彼等は、林間を徘徊したり、王室の鹿を捕へたり、又其所の路を通る金のある旅人から物を奪ひなごして其日を送つた。

此森に居た野武士は百人位もあつて、其親方は、ロビンフードといふ大膽不敵の男であつた。皆緑色の着物を着て、武器として弓矢を持

Rodin Hood, は 考古學者 John Stow の説によれば十二世紀 Richard I. の世に out-law となりしといふ。
to handle, は to treat なり。

つた。が時には、長い木槍や大刀たんびらなど携へてゐて、其の用ひ方は精しいものであつた。何か獲物があれば必ず、ロビンフードの所まで持つて来て置く。彼等はフードを王と云つて居た位だ。フードは其を公平に分けて、皆に正常な分前を與へるのであつた。

ロビンは部下を固く誠めて、夫の大きな家に住んで、自分には働かない金満家以外には誰も苦める事を許さなかつた。彼は、貧乏人には常に親切にしてやり、時には助けに行つてやる事も少くなかつた。だから良民も、彼を友として敬つて居た。

彼の死後長く、世人は好んで彼の事蹟を語つた。中には彼を賞讃するものあり、中には彼を非難するものもあつた。洵に彼は粗豪無法の輩であつた。けれ共當時の人は、今の様に、正邪を云々しなかつた。

ロビンフードに關する歌が非常に澤山出来て居て、以後數百年の間英吉利全國の賤の伏屋に歌はれたものだ。

look upon, to regard と同じ

其歌の一つにある短い話を此に記さう。

或日ロビンフードが。路傍の綠葉茂る樹蔭に立つて、葉蔭はかげの鳥の唄に耳を傾けて居る時、一人の若い男が通つて行くのを見た。此若い男は、ピカ／＼した赤布の綺麗な衣裳を着けて、樂しげに、いそ／＼歩く所は實は當日の天氣と同様如何にも目出度い様であつた。

ロビンフードは、點頭いた。

「此奴、邪魔してはならん。思ふに、此奴祝言しよげんに寺へ行くんだもの。」翌日、ロビンは同じ場所に立つた。程なく、曩の若い男が、やつて来るのを見た。けれ共、今度はあまり目出度さうでなかつた。緋の上衣は持つて居ないで、一步步いては吐息、一步步いては伸吟。

で獨語の様に云ひつづけた、

「噫、厄日！厄日！」

ロビンフード、即ち樹蔭を離れて、言つた、——

make up, 此所は to compose.

wedding は結婚の儀式にて教會にて行ふ。

say to himself, 獨言す。

money to spare for,.....に用ゐてよい金。

「おい、若エ衆！手下の野郎共の酒代しよだいにでもする錢は無エか。」
若衆は云つた、

「いや、些ちつとも無い、只だ五シルリングと指輪が一つ。」

「金の指輪か」

とロビンは問うた。

若い男は答へた、

「さうだ。金の指輪だ。是れ。」

と指し出した。

「噫、さうか。そや祝言の指輪だ。」

「私はもう此こ七年、此指輪を持つて居つた。祝言の日に嫁に取らさうと思つて、持つて居つた。吾々は、昨日式を擧げる筈だつた。所が嫁の親爺が、金満家の老耆者たひやれと約束して、娘をやる事にした。其金満家を、本人の娘は、會つた事さへないといふのだ。もう私は、腸が千

a shilling は五十錢程。
Here it is, 物を出して示す時云ふ。
help you win, は help you to win.

切れる様だ！」

「おめエ、何てエ名だ？」

「名は、アリンアデル。」

「おめエ、何呉るかい、金で呉るか、地所で呉るかい。若し乃公が、おめエに加勢して、今の金満家の親爺に構はず、おめエの花嫁を取り戻したら、？」

「私は金が無い。其代、御前さんの手下になります。」

「其女の住んでる所は、何里位ある？」

「遠くはありません。けれ共、彼は此今日式を擧げる筈で寺は二里餘向ふです。」

そこでロビンは、慌しく、歌唄うたうたひの容姿に作つて、其日の午后、寺の門に立つた。

「誰か。又何をし居るぞ？」

in fee, は in property. 不動産で。
a harp, 豎琴にて。大小あり。中世。武勇譚的の歌に和して流行す。

と、僧正が尋ねた。

ロビン曰く、

「私は、北國一の歌唄でござる。」

「能く来て呉れた。豎琴の樂程、良い樂はない。入つて、一つ弾じて

呉れ。」

と、御親切なる挨拶。

「お邪魔を仕りませう。併し、花嫁花婿を見ませぬ内は、唄ひ申さぬ、」
時其時、一老人が入つて來た。彼れ大に贅澤な品を着飾つて居る、
けれ共、年の故で腰は曲り、ヨボくして、頭は胡麻鹽ごましほであつた。其
傍に、艶な若い娘が歩いて行つた。娘の頬は眞青で、兩眼は泣き腫ら
して居た。

ロビンは、思ふた、

「兎ても、釣り合はねエ。好きな婿を自分で選ばせなけりやいかん。」

rich, 金目のかいつた。

即ち彼は、角笛を唇に押あて、吹く事三回。二分と經ぬ内に二十四
人の男、何も緑の着なしに、長き弓を手に持ち畑を横切つてバラ／＼
駆けて來た。彼等が、一列に寺に攻入つた時、先登に立つたのは、ア
リンアデルであつた。

「さア、お前は誰と添いてエか」

とロビンが、其女に尋ねた。

娘は、顔を赭めて、

「アリンアデル様と添ひたうござんす。」

と云つた。

「ぢや、アリンアデルをお前に遣る。横取したあの爺ぢやうぢには物が云ひ
たけりや、ロビンフードが相手だと知らしてやらう。」

斯くして、艶な娘と、アリンアデルとは、即座に結婚した。其に
引替へ、金満家の老人は、大立腹で家に歸つた。

deal with, 取引をする。交渉する。
then and there, 其時其場で。

さて此所に、此目出度き祝言終へて、

嫁は女王の威貌あり

さて彼等は、かの樂しき森にぞ歸る、

緑滴る樹の葉のひまに。

第八章

ブルースと蜘蛛

昔、スコットランドに、ロバートブルースといふ王があつた。王の時代は、未開紊亂の世であつたから、王も、勇敢と賢明と兩徳を兼ねて居る必要があつた。

イングランドの王は、彼と干戈を交へて、一大軍をスコットランドに繰り出して、ブルースを國外に放逐せようとしてゐた。

對戦又對戦。六度、ブルースは其の勇猛な僅かの軍勢を、大敵にあ

たるべく率ゐた。而して、六度、彼の軍は破られ、逐はれて逃げた、遂に彼の軍勢は四方八方に離散して、ブルース自らは、連山延々たる間の、森林中、淋しき所に身を匿すの止むを得ざるに至つた。

雨降る一日、ブルースは、荒れたる小屋の内に、土間に身を横へ、屋根を打つ雨滴のポタポタと云ふのを、聞いて居た。此時の彼の心は、屈托して不快で、一切の希望を放棄しようとしてゐた。彼に取つては今更に何を試みるも無用の事と、思はれたのである。

斯う考へて横になつてゐる内に、頭の上に、蜘蛛を見付けた。將に網を張らうしてゐる。ブルース、じつと見てゐると、蜘蛛は、急がず騒がず念には念を入れて、働いてゐるのであつた。六度まで、あの脆い糸をば、此方の梁から、彼方の梁まで投げ。やらうとして、六度まで思ふ様に行かない。

「可愛相なものだ。お前だつて、失敗といふ事は知つてゐるだらう

a rude shed, a rude hut.

sick, 病氣にあらず。胸悪き意。

give up, abandon, 止す。

fell short, けい fell to reach a certain point.

for the times, for the days.

was at war, was fighting. 互に交戦中。

に。」
 ゴルブルースが云つた。

けれ共、蜘蛛は、第六回の失敗では、失望しなかつた。尙一層注意をして、第七回の計畫をした。ブルースは、殆んど、自分の疲勞を忘れて、細い糸の上にブラ／＼してゐる蜘蛛を見守つた。今度も失敗か否！。糸は安全に梁に届いて、結ばれた。

「我も。亦、第七回を試みん」と、ブルースは叫んだ。

彼は立つて、部下を召集した。彼は、己の計畫を彼等に告げ、且、沈みかへつてゐる人民に、今こそ喜ぶと通知を持たせて傳令を出した。忽にして、彼の周圍に、勇烈なるスコット人の軍隊が組織せられた。戦のしなほしで、イングランドの王は、自分の國即イングランドに追ひ歸へされた。

爾來、ブルースといふ人で、蜘蛛を酷める人はないといふ事である。此小な生物の、王に與へた教訓は、遂に忘れられなかつた。

第九章

黒ダグラス

ロバートブルース王の代に、蘇格蘭土に、ダグラスといふ英雄があつた。彼の髪と鬚とは黒くて長く、顔は日に焼けて淺黒くあつた。此の爲に、世人は彼を綽名して、黒ダグラスと呼んだ。彼は、國王の良友にして、且最も強い味方の一人であつた。

かのブルースを蘇國から放逐しようと思つた英蘭土人との戦に於て、黒ダグラスは、勇猛な働を澤山にしたから、英人は非常に彼を恐れる様になつた。忽ち、黒ダグラスの恐しいといふ事が、パツと英全國に廣まつた。英蘭土の小供をおどかすには、黒ダグラスが、直近所

に居るぞと云ふ位、有功なものはない。婦人共は、子供が我慢を云つて困ると、ホラ黒ダグラスが来て攫つて行くよと云つたものだ。此一言が、子供等を温良しくさせたのである。

此度の戦役の初期に、英人に取られた大きな城が、蘇國にあつた。蘇兵は、切りに此を取返さうと思つた。で或日に、黒ダグラスは、部下の兵と共に、何か爲すべき事は無いかと思つて出掛けた。其日は丁度祭日にあつてゐたので、英兵は大概、城中に飲んで食つて騒ぎ散らしてゐた。けれ共彼等は、城壁の上に哨兵を置いて、蘇兵が不意に襲ふ様な事のない様に見張らして、それで、安全と思つて居た。

日暮方、次第に暗くなつて来た頃、英兵の一人の妻君が、子を抱いて城壁の上に登つた。彼は、城の下に連る田畑を見渡してゐる内に、何だか黒い物が、城壁の根元の方に動いて来るのを見た。黄昏で、何だか見届くる事が出来なかつたので、哨兵の或者に指し示した。

happen to be, 丁度さうなつてゐる。
unawares, unexpectedly.
grow dark, 次第に暗くなる。
in her arms, 兩腕で抱く。
look over, 眺め渡す。
make out, to find to the full.

哨兵は云つた、

「フアン—何も驚く程のものぢや無い。百姓の家畜が歸り路に迷つてゐるんだらう。百姓め大方、祭日で遊んで、家畜を仕舞ふ事を忘れてヤがるんだ。若し、ダグラスなどが暗に乗じて此ナ真似をしようものなら、お氣の毒だが、チト輕卒を後悔するだらう。」

所が、黒い物は家畜でなかつた。それは、黒ダグラスと部下の兵が城の根元に四つ匍になつて来るのであつた。一部のものは、草の中をザラ／＼と楷梯を曳すつて来た。彼等は、今にも壁の頂に上らうとしてゐた。英兵の内一人として、敵が其様な近くまで来てゐるとは夢にも思つたものはなかつた。

例の婦人は、最後の一人が角を回つて、見なくなるとまで見てゐた。彼は怖しいとは思はなかつた。そは、次第に暗くなつて行く夕暮の事であるから、實際家畜の様に見えたからである。暫くして婦人は子供

pooh, 輕蔑の時出す音。
find their way, 路を求め。
happen this way, happen to be in this way 見るべし。

の脊を叩いて唄ひかけた、——

「黙りよ、黙りよ、お寶よ、

黙りよ、黙りよ、じれるなよ、

黒ダグラスは、來ないのよ。」

突然彼の後へに荒々しい聲あり。曰く、

「勿々、さうでない。」

婦人は見ました、眞物の黒ダグラスが其所に突立つてゐた、其時既に一人の蘇兵が梯子を登り切つて、壁に跳り上つた。續いて、又一人、又一人、又一人、遂に壁は、蘇兵を以て掩はれた。忽ち城中各所に激戦が起つた。併し英軍は只呆氣あつめに取られて出来る事も能うしなかつた、で大勢討死した。少しの隙に黒ダグラスと其部下とは城を占領して、元來蘇軍の有であつた此城は茲に取り復された。

例の婦人と其子供とに就ては、黒ダグラスは誰にも此を害する事を

All at once, suddenly.

climb off, complete を示す。

were the masters of, occupied. As for, 就ては關しては。

許さなかつた。程なく、親子は英蘭土に歸つた。が其後此婦人は黒ダグラスに就て、あゝいふ風な唄をもつと唄つたか如何かは知れてゐない。

第十章

ゴザムの三人

英國にゴサムといふ町がある。此處に住み來つた變人に就て可笑しい話が傳つてゐる。

或日橋の上でゴサム人が二人出逢つた。ホツヂといふ方は市いちから歸る、ピーターといふ方は市に行くといふ所であつた。

ホ「何處へ行くんだイ」

ピ「羊を買ひに市へ行くんだ」

ホ「羊を買ふ？ 歸りにヤ何所を通る氣かい」

used to live, 住み來つた。土着の

「此橋を渡るだらうサ」

「いや、そいつアいけない」

「それ共、乃公ア通る」

「通さない」

「通る」

其所で二人は其所に羊が百匹も居るように杖で地面を叩いた。

「ビーターは叫んで云つた、

「しつかりして大きな目を開いて見てゐろ！乃公の羊は橋の上などで

跳りやしない。」

とホツチは云つた。

「何處で飛ばうと乃公の知つた事で無エ。けども羊を渡すことはなら

ねわ。」

「だつて渡らせるわね」ビーターが云つた。

「覺悟しろ。愚圖愚圖云ふと、息の根を止めるぞ。」

「其の氣か？」と、ビーターは云つた。

丁度此時ゴサムの人又一人、馬に食品を附けて市から來た。彼は

町の人が羊を彼是云つて喧嘩してゐるのを聞いたが二人の間に羊など

一匹も居なかつたから、立ち止つて話しかけた。

「本統に、お前らは馬鹿だ！ちと智慧を附けようなぞたア、さつぱ

り思はねエンだから、實に驚くねエ。——おいビーター、一寸此囊を

擔がして呉んねわ。」

ビーターは頼まれた通にしてやると、彼は其食品を橋の椽の方に持

つて行つた。

「さア眼糞を取つてよく見ろイ。一つ伶俐になろイ。」

といつて、彼は囊の口を開いて、食品を残らず川の中投げ込んだ。

「さアお前等。乃公の囊に食物が幾ら残つてゐるか知つてるか。」

as though, as if 全く同じ。

Look out, Be watchful.

put fingers in mouth, 大なる脅かし文句なり。

と彼は云つた。

ホツヂとピーターは、異口同音に叫んだ、

「何も無にサ！」

「宜しい。此所に立つて、空^{から}つほの事を喧嘩しとるお前等は頭の中は

丁度此の囊の中の食物と同様丸で空^{から}尻^{はいつ}だ。」

と此の人は云ふて聞かせた。

第十一章

ゴーサンの他の智者

或る日王がやつて来たから此の町をお通りになるだろうと云ふ報せがゴーサンにあつた、この事は少しもゴーサンの人々を喜ばさなかつた、彼等は王を憎んで居た、なせならば王は残酷で悪い人だと云ふことを知つて居たからである。若しも彼が彼等の町に來たならば王及

what should they do? 彼等はどうするだらう。

び王の部下に對して食物や宿を探してやらなければなるまい、そうして若しも彼が欲しいと思つた物を見つけた時はきつと自分の物に持つて行くに違ひない、彼等はどうしたら可いたらう、彼等は此の事件に就て評議する爲めに寄り合つた。

賢い人の一人が云ふのに、

「我々は森に行つて大きな木を切り倒してさうして此の町に續いて居る總へての町を夫を以て固めてしまを……」

故に彼等は斧を以て直ぐに出て行つて町に續いて居る總へての町や小路を丸太や粗朶で一ぱいにしてしまつた、王の騎兵が此町に到着するのに困難であろう、彼等は新しい道を作るか全々計畫を止めてしまふか或は他に行つてしまふであらう、

王が來た時に此道が閉されてあるのを見て非常に怒つた、

「此道に誰が之等の木を切り倒してしまつたのだ」

through the town 町を通つて。

to be sure 確である。

give up 見捨てる。止める。

chop down 切り倒す。

block up 木を以て町の通路を固めると。

と彼は來かかつた二人の小供に聞いた、その小供の云ふのに、「ゴーズンの人々です」

「宜しい、行つてゴーズンの人々に報行官を送つて彼等の鼻を斬つてやろう」と王が云つた、二人の小供は出来るだけ早く町に走つて王の云つた事を語た、總べての人々は非常に驚いた、人々は家から家へ走つて此の報せを傳へた、そして互にどうしたら宜いだろうと尋ねて居た、
「そうだと、然し我々はどうしたら宜かろう」と他の者は云つた、
其處でド・ベンと云ふ彼等の總へての中で最も智慧のある人が語つた。

「まア已れに任せ、澤山の人の殺されたのも利口であるからだ、馬鹿者の殺されたと云ふ話は已れは聞いた事はない、だから報行官が來た時に我々は馬鹿のような行をしよう」

「宜かろう、我々は皆馬鹿の様な行をしよう」

と他の一人は叫んだ、

王の部下の者が其の道を開くのは容易なことではなかつた、そうして彼等がそれをなして居る間をば待ち臥れてロンドンに歸へつてしまつた、然し或る朝早く報行官は恐ろしき兵士の一部隊を率ひて其の材木の中を通り野原に出でゴーズンに向つて來た、彼等が町に到着する一寸前に奇妙なる有様を見た、年寄が大きな石を山の上に引張り上げて總べての若い人は是を見て居る、そうして大きな聲で吟呻とめいて居た。

報行官は馬を止めて彼等は何をして居るのだから聞いた。

「我々は太陽が出るように小山の上に石を運んで居るのです」と年寄の一人が云つた、報行官は云ふに。

「馬鹿奴太陽は何の助けもなくして昇ると云ふことを知らないのか」
「あゝそうですかほんに、私はそんな事は考へなかつた何んぞ旦那は賢い人でせう」と年寄が云つた、

to open the road 路を開く。
without any help 助なくして。

as fast as they could 彼等の出来るだけ早く。
in great fright 非常なる驚き。
got off 切り落す。
carrying the news 知らせる傳へる。
like fool 馬鹿の様な。

報行官が若者に云ふに

「汝は何をして居るのだ」

「オ、我々は親父が働いている間うなつて居るのです」と彼等は答へた、

「わかつた、だから此土地は駄目だ」と云つて町の方へ行つてしまつた、

彼は間もなく多くの人が石の壁を作らへて居る所へ來た、

「汝達は何をして居るのだ」

男「へい、旦那様此の野には郭公が居るのです我々はそれが逃げて行かない様に廻りに壁を作らへて居るのです」

報「馬鹿奴幾ら汝が高く作らへても鳥は汝の壁の上を越えて飛んで行く事を知らないのか」

男「なせです、え私達はそんな事は決して考へなかつた、何と旦那は

賢いのでせう」

報行官は次に戸を負ふて歩いて行く人と會つた、

「何處へ汝は行くのだ。」

男「私は今長い旅行に出立する處です」

男「なせ汝は戸を持つて行くのか」

男「私は家に金を置いて來ました」

報「そんならなせ汝は戸を家へ置いて來なかつたか」

男「私は盜賊も恐れます御覽の通り私と一所に戸を持つて居れば彼等はそれを破り開ける事は出來ません」

報「馬鹿奴家へ戸を置いてさうして金を汝が持つて行く方が安全だ、

男「あゝさうですけども私はそんな事は考へませんでした、私が今迄見た中で旦那が一番賢い人だ」

そこで報行官は彼の部下と共に馬に乗つて行つた、然し彼等の會ふ

at home 家に。
ever saw 今までに見た。
simple people 馬鹿の者。

the world goes everywhere 世上に行わるゝ事。
that is the way こん具合に。
number of men 多くの人々。

た人は皆馬鹿氣た事をして居た、

『實にゴーズンの人々は皆馬鹿な奴だと私は思います』と一人の騎兵が云つた、

『眞實だそのような馬鹿な奴を、傷けるのは恥である』と他の者が云つた、

『我々はロンドンに歸へつて彼等に就て總へての事を王に語らう』と報行官は云つた、

『左様々々我々はそうしませう』と騎兵は云つた、

夫故に彼等は歸へつてしまつた、そうしてゴーズンは馬鹿者の町だと王に告げた、王は笑ひ且つ云つた、

『それが事實なれば彼等を殺さずにそうして彼等の鼻も其まゝにしてやろう、』

the case 事實。

第十一章

デイーの水車小屋

昔、デイー河の土手に粉屋が棲んで居つた、彼は英國中の最も幸なる人であつた、彼は常に終日忙がしく働き又雲雀の如く面白氣に唄を歌ふて居た、彼は非常に快活であつたから總べ他の人々をも快活にしたので國中の人々は喜んで彼の愉快なる生活の様子を噂して居た、終に此事を王がお聞きになつた、

『予は行つて此の不思議な粉引と話して見よう彼は予に幸になる方法を教へて呉れるだらう』と王が云つた、

王が水車小屋にお這入りになると粉屋の歌がすぐ聞へる。

我何人も羨まず

go down の down を書きたるは都より田舎等へ行く時に云ふ、
from morning till night 終日。

何故なれば我々は

出来うる限りの業をもて

幸を求むる者なれば

また何人も羨まず

そこで王は云つた、

『汝は過つて居る此上もなく過まつて居る予は汝を羨むわい。そうして若し予が汝のように氣輕になれるなら予は汝と位置を交換する事を望むわい』

粉屋は微笑して王に敬禮をした、

『私はとても貴王と位置を交換すると云ふ如な事は考へる事も出来ません』と彼は云つた、

『それなら私に話して呉れい何ふ云ふ譯で此の塵だらけの小屋に居て其様に愉快で又其様に喜ばしいか又それに反して予は王でありながら

始終悲しくそうして困難であるのか、』

粉屋は再び笑つて云つた、

『私は貴王が何故に悲しいのかは存じませんが私はどうして幸であるかと云ふ事は易く御話し致す事が出来ず、私は私の妻を愛し小供を愛しますまた友人をも愛します。そうして彼等も私を愛して呉れます。又私は何人からも一ペニーだつて借りて居りません。どうして私が不幸になるでせうか………なせなれば此處にはディー河があり。そうして毎日それは私の水車を回轉して呉れます。そうして其水車が私の妻や私の小供や自分を養ふべき穀物を粉にして呉れるのですもの』其處で王は

『成程、解つた其通りに暮せい、又汝は幸福であれ、然しお前は羨やましいぞ。汝の塵だらけの帽子は予の金の冠りよりも價值がある。汝の水車は予の國家が予に盡して呉れるよりも尙能く汝に盡して居る若し

I owe not a penny to any man. 何人からも一ペニーだつて借りて居ない
此所に一ペニーと書きたるはほんの僅かと云ふ意味なり。
Say no more もう云ふな。解つた解つた。

light-hearted 氣輕。
bowed 敬禮すること。

汝のような人がもつと多く居たならば此の世はどんな好い場所になる
であろうか。さらばぢや』

王は踵を返して悲しそうに歩いて行つた、粉屋は彼の仕事を再び始
めそうして歌つた、

嗚呼我は此よなくも

幸多き身なるかも

デー河の

ほとりに棲む我は

第十三章

サアフ # リップ シドニー

激戦が初まつて、戦場は死人や瀕死の人を以て覆ふはれて居つた、
空は熱く息も詰る様であつた、太陽は容赦なく血や塵の中に横たはれ

dying men 瀕死の人。
今正に死なんとして居る人。
with out pity 容赦なく。

る負傷兵を照して居つた

此等負傷兵の中に一人の貴族が居た、その温厚にして親切なる爲め
一般の人々より愛されて居つたのである、然し今の彼れは此の世の中
の最も哀れなる人より遙かに不幸の身であつた、彼れは傷を負ひ將に
死なんとして苦痛と渴きに苦悶して居つた

戦争が終つた時彼れの友人が彼れを助けんとして急ぎ來り、或る一
人の兵士は手にコップを持って駆け付けて來た、

『サア……サアフ # リップよ僕は君に小川から清らかな冷い水を持って來
てあげた、僕は君が飲み宜い様に頭を持ち上げてあげやうよ』と彼れ
の友人が云つた

コップはサアフ # リップの唇に當てられた、如何に彼れは辱けなげに其
の持て來て呉れた人を仰ぎ見たであらうか、其時である、ゆくらくなく
も彼れの眼と彼れの傍の地上に横はれる人の瀕死の軍人の眼と相合し

close by 傍らに。

其の哀れなる人の顔に現れしたる羨望の色は語るに勝る苦痛を示して居つた

『此の水を彼の人に與へてくれ給へ』とサアフリップは云つた

此所に於て彼れにコップを與へて曰く

『さあ……戦友よ、此れを上げましよう、君は己より渴へて居る。』

嗚呼彼れは何んど勇敢で高尚なる人物であらう、サアフリップシド

ニーの姓名は決して忘れられぬであらう、何んとなれば他人の利益と

云ふことを常に彼れの心中に抱ける博愛の紳士の名前であるから、

彼れが死んだと聞た時人々が泣いたと云ふのは不思議であらうか？

傳へ聞く、彼れが墓所に運ばれた其の日に於て世間の人の眼は涙を

以て満された

高きも低きも富者も貧者も皆一人の友人を失ひたる如く感じた、總

ての人は且て見ざりし親切にして偉大なる男子の死を悲むたのであ

る、

第十四章

恩知らずの兵士

尙一とつ戦場の話があります、これは私が今お話したのと殆ど同一である、

サーフリップシドニーの後百年たらずにしてスウキーデンマークの間に戦が起つた、そうして激戦の或一日、スウキーデン人は破れて其國から追拂はれた、デンマークの一人の兵士が輕傷を受けて地上に臥して居つた、彼は瓶からして水を飲ふとした時、突然彼は誰か呼び掛けるのを聞いた、

『オ、君一杯呉れ給へ私は死にかゝつて居る！』と叫んだ者は負傷し

not quite hundred years 百年たらず。
All at once 突然。
give me a drink 一杯呉れ。

never be forgotten 決して忘れられない。
in his mind 彼れの心中に

たるスウ^キーデン人であつた、彼れはほんの少しく離れた地面に横たはつて居た、デンマーク人は直に彼の處に行つた、彼は倒れたる敵の傍に膝まづき彼の口に瓶をあてがつた、

『飲め！君は己れよりか尙必要である』

彼が、斯く云ひも了らぬ時スウ^キーデン人は肘を突いて立上つた、彼はポケットからピストルを取り出し彼を助けようとした人を撃つた、弾丸はデンマーク人の肩をかすつて彼には大した傷は付なかつた、

『卑劣者め……己は汝を助けようとしたのだ然るに汝は己に報ゆるに己を殺そうとした、よし／＼己は汝を殺すぞ己は水全體を汝に與へようと思つただけれども今汝には半分はかやるまじ』と叫んだ

それ故に彼は其半分を飲んで残りをスウ^キーデン人に與へた、デンマーク王が此事を聞いた時に彼を迎にやつて其あつた通りを物

語らせた、

『彼が汝を殺そうとした時に臨んでなせ汝はスウ^キーデン人の生命を救した』と王は問ふた、

『でも私には負傷したる敵を殺すと云ふことは決して出来ません』と兵士は答へた、

『眞に汝は高貴族たるの資格を有せり』

と王は云つた、さうして彼に報ゆるに勳爵士を以てし彼に高貴なる稱號を與へた、

第十五章

サアハムレー、ギルバルト、物語

今を去る三百年以前に英國にサーハムレー、ギルバルトと呼ばれた

at that time 其の時代に。

only a little way off ほんの少し離れて。
by the side 傍。
on his elbow 彼れの肘で
sent for 迎にやる。呼ばせる
just as 通り。

英雄があつた、其時代にはアメリカには一人の白色人種も居らなかつた、土地は森を以て覆はれ今日の大都會や美しき畑である處は只樹木茂れる處や或は沼澤にして其中には殘酷なるインデアン人と野獸とが徘徊して居た、

サー、ハムレー、ギルバルトはアメリカに最初多くの人に移住せんと企た一人であつた、二度迄彼は海を越へて人々や舟を送らうとしたが二度共失敗しとうして英國に吹き歸された、二度目には彼はスクァイレルと云ふ小さな船に乗つて居つた、他の船はゴールドンヒンドと呼ばれたもので兩船は相接近して居た、彼が陸を離れてから三日目に風がやんで舟は波の上に漂ふて居た、時は夜空は非常に寒くなつた、風が東から吹いて來た、大きな白き氷山は彼等の廻りに漂よふて來た、朝に至つて此の小さな舟は漂よへる氷山に取り圍まれて居た、其

over the sea 海を越えて。
on a little ship 小さな舟に乗つて。

ヒンドの人々達は手に本を開いてスクァイレルの甲板の上に坐して居るサー、ハムレーを見た、彼は彼等と呼んでとうして云つた、
『勇敢なれ諸君陸上に於けるが如く海上に於ても天帝を信せよ』
夜は再び來た、霧深く雨降る嵐の晩であつた、直にヒンドの人々はスクァイレルの甲板の燈の消いたのを見た、勇敢なサートンプレーを乗せた小さな船及び船員は浪の飲む處となつたのである、

第十六章

サー、ウオルター、ラレー

嘗つて英國にウオルター、ラレーと呼ばれたる勇敢にして高尚なる人があつた、彼れは勇敢高尚なるのみならず又美はしく且つ町寧なる人であつた、故に皇后は彼れを勳爵士となし且つサーウオルターラレー

got out 消える。

Not only,.....but.....also; 何々のみならず又何々なり即ち此の所にては(勇敢にして高尚なるのみならず又美麗にし丁寧.....

いと名付けられた、

私は其由来を話さう

ラレーが青年であつた時一日彼れはロンドンの町を歩いて居つた、

其の時代には此の町は敷石もなく又人道もなかつた、ラレーは非常な美しいスタイルに衣服を着又美麗な深紅な外套を着て居つた、

彼れが通つて行くに悪い道を歩かない様にするのは困難だつた、彼れは美しき新調の靴を穿つて居つたのである、間もなく彼れは此の町のはづれから他の町に達した時に泥水の溜の所に來た、彼れは歩いて渡ることが出来なかつた、が其の上を飛越ゆる事は出来たのだ。

彼れが何うしようと考へて居た時、彼れは不圖眼を上げた、此の水溜りの向ふ側に此の町をやつて來たのは誰れであらう？

之れぞ即ち淑女や腰元を従へて居つた、英國の女皇エリザベスであ

At that time (At this period) 即ち此所に於ては此の時代の云ふ意なり。
to keep from 保つ one side of the street 町はづれ jump over 飛越える。
to look up 見上げる。

つた、女皇は此のきたなき町に於ける水溜を見又其の片端に立つて居つた真紅の外套を着た美しき青年を御覽になつた、女皇は如何にして此所を御通りになつたであらうか？

青年のラレーは女皇を拜した時には我身を忘れてしまつた、彼れは女皇を助けようとのみ考へた、其所には彼れが爲し得るとが唯だ一つあつたのだ而して其れには何人も考へ及ばなかつたのだ

彼れは自分の真紅の外套を脱いで其の悪道へ敷いた、女皇は美しき絨氈の上を歩くが如く今其の上を歩くことが出来たのである、

女皇は其の上を歩いて通た、女皇は悪路を安々と越へた、女皇の御足はスカルミに觸れなかつた、女皇は少しく御休みになつて青年に御禮を述べられた、

女皇は御供の者と共に真直に歩いて御出になつた時淑女の一人に御尋ねになつた、

to take off (to withdraw) 去る 即ち此の場合にては外套を脱ぐことになる。

「私達をあんなに立派に助けてくれたあの勇敢の紳士は誰ですか？」
 「彼れはウォルターラレーと申します」と淑女は申上げた、
 「彼れに御禮をませう」と女皇は申された、

間もなく女皇はラレーを御殿に来るように迎ひを御遣はしになつた、

青年は行つた然し彼は着る可き眞紅な外套は持て居らなかつた、そこで女皇は英國の紳士淑女が取り圍むで居つたなかで彼れを勳爵士にしてやられた、而して彼れは其の時からサーウォルターラレーとして知られ又女皇の御寵愛の人として知られた、

サーウォルターラレーと私が既に諸君に御話致しましたサーハンブレールギルバルトとは異母兄弟であつた、

サーハンブレールがアメリカへ第一の航海をなした時にはサーウォルターは彼れと一所であつた、此れから彼サーウォルターはアメリカに

He shall have his reward, 彼れに報酬を與へよ。
 to sent for 向ひにやる。
 from that time 其の時より。

移住させる爲めに屢々人を送らうと試みた、

然し彼れの送つた人々は唯だ廣大なる森、瘴猛なる獸、野蠻なるインデヤン人を發見したのみであつた、彼等の中の或者は英國に歸り或る者は饑に餓れて死し又其の或る者は森の中に行衛を失なつた、終にサーウォルターは人々をアメリカへ送ることを斷念した、

然し彼れは英國の人民の殆んど知らない物をアメリカに於て二つ發見した、一つは馬鈴薯他は煙草であつた、

若し諸君がアイルランドに行くことがあつたならサーウォルターがアメリカから持て來た二三の馬鈴薯を植た所を教へられるであらう、彼れは自分の友人にインデヤン人は如何にして之れを食するかを説明し東半球にも亦アメリカ同様に之等が繁茂するだらうと云ふことを説明した、

サーウォルターはインデヤン人が煙草葉をフカして居るのを見た、

You may be shown に説明されるであらう 即ち教へてもらうだらう。
 to send 送つた。
 gave up 見捨てた。
 Old world を東半球と譯したるは亞米利加發見以前の土地即ち東半球なればなり而してアメリカは新大陸即ち New なり。

彼れは自分にも同様なることが出来るたらうと思つて英國に其の葉を以て來た、英國人は之れまで煙草を用ひたことはない、又サーウォルターが常に木の葉の捲たものをフカシて居るのを見た總ての人は之れは不思議の有様だと思つて居つた、

一日彼れが自分の椅子に座して喫煙して居る時彼れの召使が室の中に入れて來た、其の男は自分の主人の頭の上で煙が渦捲て居るのを見た、彼は主人に火が付て居るのだらうと思つた、

彼は水を取りに走り出て、水の一ぱい入てる手桶を見付けた、彼は急で歸て來てサーウォルターの顔に水を掛けた、勿論火は消えてしまつた、

以後非常の多くの人々喫煙することを學び今日では世界中總ての國々で之れを用ひて居る、若しサー、ウォルター、ラレーが手を付けなかつたらよかつたらうに。

They would grow in the old World as well as New. 東半球に於てもアメリカの如くよく繁茂するだらう。
let alone (to leave unmolested or not be approach) 手をつけずになく。
He was on fire 彼れに火が付て居るのだと思つた。
put out 消える。

第十七章

ポカホントス

嘗つてジョン、スミスと云ふ非常に勇敢な人があつた、彼れが昔アメリカに來た時は大木至る所に繁茂し多くの恐ろしき獸やインディアン人が居つた、彼れの冒險談は非常に澤山ある、其の或物は眞實であるが又他の或るものは不正確である、總て之等の中最も有名なる話は次ぎのものである、

一日スミスが森の中に居た時インディアン人が彼れを襲ふて彼等の捕虜となつた、インディアン人は彼を王の前に連れて行た、而して暫時の間は彼等は彼を殺すように用意した、

一つの大きな石が運ばれスミスは彼れの頭を其の上にして横たはら

to come upon (to attack.) 襲ふ。
they made to put him to death 彼等は彼れを殺さうと用意した。

された、そこで丈け高さインデア人は大きな二つの棍棒を携へて彼の前に来た、王及王の多くの部下は見物する爲めに周りに立つた、インデア人達は彼等の棍棒を上げた、寸時の間彼等はスミスの頭上に落したであらう

時にインデア人の少女が突入した、彼女は王の娘であつた、彼女の名はボカホンタスと云つた、彼女の女はスミスと振り上げタル棍棒との間に走り入つた、彼女の女はスミスの頭にかじり付き、其上に自分の頭を横たへた、

『オー父上、此の人の命を助けて下さい、彼れは御身を害さぬことは確かです、私達は彼れの友達であるべき筈です』と彼の女は叫んだ、棍棒を携へた彼等は此の子を害さない様にさしたから打つことが出来なかつた、王は初めの内は何うしてよいかわからなかつた、そこで彼は或る兵士に語つた、而して彼等はスミスを地面より起した彼等は

彼れの手や足の繩を解き彼を自由にしてやつた、

次ぎの日はスミスを家に送てやつた、而して數多のインデア人を彼に付けてやり彼れが害されぬ様に保護してやつた、

以後彼れの終身ボカホンタスは白人の友達であつた、彼の女は白人を助ける爲めに非常に働いたのである

第十八章

ジョウジワシントンと彼の手斧

ジョウジワシントンが極く幼き小供であつた時に彼のお父さんは彼に手斧を興へた、それは輝き且つ新しきものでジョウジは非常に喜んで歩き廻りそうしてそれで物を切つて居た、

彼は庭にかけて行つた、そこで彼は一の木を見た、

『來て私を切つて呉れ』と其木が彼に云つてるように見えた、

as long as she lived (through all the life) 彼の女の終身の間。
I am sure 確かです。
at first 初めの内に。

She clasped Smith's head with her arms. 彼の女がスミスの頭にかじりつ
いた。
in another moment 一瞬の内に。
Just then 丁度其の時。

ジョウジは父の下男が森で大きな木を切り倒して居るのを屢々見て居た、そうして彼は此木が音をして庭に倒れるのを見るのは面白いであらうと考へた、故に彼は其小さな手斧を持って切りかゝつた、そうして其木は極く小さな物であつたから其を倒してしまふには長くかゝらなかつた、

後間もなく彼の父も傍に來ました、

『誰が私の美しき若櫻の木を切つたのかそれは此國に於て此種類の中たつた一つの物であるさうして其は私にとつても莫大の價を有するものである』と彼は叫んだ、

彼が傍に來た時には非常に怒つて居た、

『若し私があの櫻の木を切つた奴を知つたならば俺は………ム、……俺は……』と叫んだ、

『お父さん私は眞實の事をお話し致しませう私が自分の手斧で其木を

切つたのです』と幼きジョウジが叫んだ、

彼のお父さんは怒を忘れた、

『ジョウジよ』と彼は云つて幼なきジョウジを抱いた、

『私は汝が一つの偽を吐くよりは寧ろ十二本の櫻を失ふ方が優しのだ』

第十九章

グレースダーリング

十一月の暗き或る朝の事であつた、海上は嵐があり、舟はハーニアイスランドの沖に於て暗礁に打上げられた、浪のために二つに碎かれて其一半は水に洗ひ去られてしまつた、そうして他の一半は尙岩の上に残り、生残つた人々は、之れに縫付いて居た、然し浪は其上に突き進んで來て間もなくそれも沈め去らんとするのである、

he took the fellow in his arms
half drowned 彼は幼きジョウジを抱いた。
半ば沈みかゝつて居る。

cut down 切り倒す。
in the forest 森の中に。
come home come close 近づく。
great deal of money 莫大なる價。
set to work (to begin laboring) 仕事に取りかゝる 即ち此所にては切りかゝる。

そこに半ば溺れたる憐れな人々を誰か助ける事が出来るであろうか？、

海岸には一つの燈台がある、そこには此の嵐の夜中グレースダールが嵐の叫ぶのを聞いて居た、グレースは燈臺番の娘である、彼は物覺へが付てから始終此海岸に住んで居たのである。

暗闇たる夜中風や浪の音の間に彼女は恐ろしき叫び聲を聞いた、日が出た時に彼女は一哩斗り隔て、怒濤の中に難破船を見た、彼女は帆柱の上に這ひ上がつて居る船員を見た、

『我々は彼等を救はなければならぬ我々は直にボートで出立しませう』と彼女は叫んだ、

『とても駄目だ。我々は彼等に達する事は出来ない』と彼女の父は叫んだ、

彼は老人だから此の恐ろしき浪の勢を知つて居る。

『我々は此處に止つて居て彼等の死ぬのを見て居る事は出来ませんごうしても我々は彼等を救はなければなりません』と云つた、

彼女の父は(否)と云ふ事が出来なかつた、

暫時にして彼等是用意が出来た、彼等は大きな燈臺のボートで出立した、グレースは一つの撓を取り彼女の父は他の撓で漕いだ、彼等は難破船に向つて進んで行つた、然し斯の如き海であるからボートは非常にゆるれて恰も彼等は其の場所に決して到着出来ないように見えた、

終に彼等は其の岩に近づいた、其の時は前よりは一層海は危険であつた、恐ろしき浪はボートにぶつかつてボートは粉々に碎けてしまわん斗である、若しも勇敢なる少女の力及び其の熟練がなかつたならば、

然し幾多の困難の後グレースの父も難破船に這ひ上つた、其の間グ

at last 終に。
were close 到着した。
in pieces 粉な粉に。
by and by 間もなく。

driven on 打ち上げられた。dashing over it 其の上に突き進む。
as long as the could remember 彼れが物覺へが付てから始終。
with the angry water all around it 怒濤の中に

リースは一人ボートに残つて居た、そこで疲れたる水夫は一人々々ボートに救はれた、少女は此纖弱なるボートを流されてしまふか岩の鋭き角にぶつかつて粉々になりそうな時必死に之を保つて居たのである。

程なく彼女の父もボートに歸へつて來た、強き手にて撓を漕ぎ暫くにして、全員は燈臺に無事に歸つた、そこでグレースは彼が水夫として勇敢なる行をなした如く看護人として優しき行をなした、彼女は嵐が止むで彼等が自分の家に歸へることが出来るやうに十分快復する迄此の難破者に非常に親切に注意をして居た、

これはズット昔に起つた事であるがグレースの名前は決して忘られないであろう、彼女は今尙彼の古い家から余り遠くない處の小さな墓場に埋葬されてある、年々多くの人が彼女の墓を見に行きそうして其處には勇敢なる小女の名譽の爲めに石碑が立てられてある、其石碑は

climbed upon 這ひ上る。
one by one 一人一人。
on board 甲板に。
not far from 遠くない。
a long time ago 昔に。
by the sea 海岸に。

大ききは無いが有名なるグレースグリーリングがなした高尚なる行に付いて語つて居る、彼女が石碑には彼が右手にしつかりとボートの撓を握てる姿が彫刻されてある、

第二十章

ウィリアム、テル物語

スウヰツルランドの人々は今日の如く常に自由でなく幸福ではなかつた、昔ゲッスラーと云ふ豪慢なる暴君があつて人民を支配し實に彼等の運命を堪え難きものになした、

一日此の暴君は四辻に長い竿を立て、彼の帽子を其先に置いた、そうして此所に來る何人も其帽子の前に敬禮をしなければならぬと命令した、然しウィリアム、テルと云ふ人があつて此事をなさなかつた、彼も腕組をして立止り其ふらくして居る帽子を冷笑した、彼はゲッス

bow down 敬禮する folded arms 腕組をする。
many years ago 昔 set up 建てる public square 四辻。

ラー其人にすら敬禮しようとは思はなかったのである。

ゲッスラーが此事を聞いた時に非常に怒つた、他の人も同じく彼に背くに至り、國中の人は彼に對して直ちに反逆せん事を怖れたので、彼は、此剛邁なる人を罰しようと思つた。

ツイリアム、テルの家は山中にある、彼は有名なる獵師であつた、此の世中に弓矢にかけては誰も彼のようには上手になす事が出来なかつた、ゲッスラーは其事を知つて居た、故に獵師其者の熟練が彼を非運に陥らすように酷い計畧を考へた、彼はテルの幼き小供の頭の上に林檎を乗せて四辻に立つて居れと命令した、そこで彼はテルに自分の一矢で其林檎を射れと命じた、

テルは他の方法を以て自分の技倆を試すように願つた、若し小供が動いたらどうしよう、若しも弓手が動いたらどうしよう、若しも此矢が真直に行かなかつたらどうしよう！、

one of his arrows 一筋の矢。
whole country 全國。
so well as he 彼れのように上手に。

「あなたは私に自分の小供を殺させるのか」と彼は云つた、

「黙まれ汝は一矢で林檎を射らなければならぬ若し汝が過まれば私の兵士は汝の面前で汝の小供を殺すだろう」とゲッスラーが云つた、

そこでテルは黙つて彼の弓に矢を番へた、彼は狙つた、切つて放した。小供はしつかりと静かに立つて居た、彼は驚かなかつた、何となれば彼はお父さんの技倆に就て信用し切つて居たからである、矢は空を切つてヒューと鳴つた、其矢は林檎の真中に當つた、さうして夫を飛ばした、見て居た人は喜び叫んだ、

テルが其場から去らむとした時に彼の着物の中に隠し持つて居た矢を落した、

「貴様此第二の矢はどうする積りか」と王は叫んだ、テルは豪然と答へて曰く

「暴君よ若し私が自分の小供を傷付けたならば此矢は彼の胸を貫く爲

Say no more (Don't say more) 黙まれ。
before your eyes 面前で。
turning away 去る。

めだ、』

尙一つの物語がある、夫は此事から余り後の事ではないテルは彼の
一筋の矢で王を射つた、斯くして彼の國を自由になしたのである。

第二十一章

アーノルド、ウインケルライド

大軍がスウキツランドに進軍して来た、若し其れを猶進軍させたな
ら再び追ひ拂ふことは出来なからう、兵士は町を焼き、百姓の穀物や
羊を奪ひ、人々は奴隷にされるであらう、

スウキツランドの人々は總て此の事を知つた、彼等は自分達の家自
分達の生命の爲めに戦はなければならぬと云ふことを知つた、そこで
彼等は如何にして彼等の國家を救ふことが出来るだらうと云ふことを
計る爲め山を越ぬ谷を越れてやつてきた、或者は弓矢を持ち或る者は

大鎌を或は大熊手を携へ又た或者は唯杖や棍棒のみを持ってやつて來
た、

然し彼等の敵は道路に沿うて正々堂々と進んで来た、各々兵士は全
く武器を以て固められて居つた、彼等の動く時には列を亂さず鎗、楯、
其他輝いたる武器は人の眼を射つた哀れなる國民は斯くの如き敵に對
し如何なることをなし得たらう、

彼等の大將は叫んで曰く、

『我々は彼等の列を破らねばならぬ、彼等が列を正して居る間は彼等
を害することは出来ない、』

『弓を持てるものは矢を射つた、然し矢は彼等の楯で逸れてしまつた
他の者は或は棍棒或は石を試みた、然し効力がなかつた、列は猶ほ亂
れなかつた、兵士は嚴然として進んで来た、彼等の楯は互々に重り合
ひ、千の鎗は太陽に輝ける多くの剛毛の如くに見わた、彼等は杖や石

kept in line 列に於て保つ即ち隊伍堂々。

kept close together 列を亂さずに。

with no better luck. (with は結果を表はす前置詞) なり即ち効力の無きこと
なる。

not long after 餘り後のことではない。

driving out 追ひ拂ふ、with bows and arrows 弓矢を持てる。

や獵師の矢に何等の注意を拂つたらう?

『若しも彼等の列を破ることが出来なかつたならば我々は戦ふ機會はなく我々の國は亡びてしまふであらう』とスウス人は云つた、

此時アーノルド、ウインケルライドは進み出て、

彼は曰く

『あの山の傍には我が幸福なる家庭がある、其所には私の妻や小供が私の歸りを待つてゐるのだ、然し彼等は再び私を見ることが出来ないだらう、今日私は國に命を捧げるのである、而して君は爲せ私の友人、君は君の義務を爲せ、然らばスウツルランドは助かるだらう、

此等の言葉を以て彼れは前方へ走た、

『我れに従へ、我は敵の戦列を破り、君等に出来るだけ勇敢に戦はしてやらう』と彼れは戦友に叫んだ

彼れ手には一物も持たなかつた、棍棒も、石も、他の武器も。然し

彼れは鎗の簇居る所へ真直ぐに突進した、

彼れが正しく列の中に突入した時叫んだ、

『路を開け』

彼等の鎗先に掛けん多量の鎗は彼の方に向けられた、兵士は自分の場所に止まることを忘れた、列は亂れた、アーノルドの友人は彼に従て勇敢に突進した、彼等は何んでも持て居たもので戦つた、彼等は敵の鎗や桶を奪つた、彼等は少しも恐れなかつた、彼等は自分の家と懐かしき郷國の事のみ考へて居つた、而して彼等は終に勝利を得た、嘗つて此の如き戦は未だ何人も知らなんだ、然しスウツルランドは救はれて、アーノルドウインケル、ライドは無益の死を爲さなかつた、

as bravely as he can 彼れの出来得る限り勇敢に。
Make way for liberty (Open a passage) 路を開け。
Such a battle no one ever know before (There was not such a battle before) 嘗つて此の如き戦争はなかつた。

what cared they for.....? 彼は如何に注意をなしたか? と云ふことは反語にして實は They did not care for の意味なり。
Follow me (come after me) 私に従へ。

第二十二章

アトリーの鐘

アトリーは伊太利亞の或る一小都で、非常に古い町で或る峻しき山の山腹にあつた。

昔アトリーの王は美しき大鐘を買つて其れを市場の塔の上に掛けた而して殆んど地に着きさうな長き紐を鐘に付けた、極く小さな小供も此の紐を引いて鳴らすことができた、

『此れは裁判の鐘だ』と王が云つた、

終に總ての用意が出来た時アトリーの人民は大休日を得たのだ、總て男も女も小供も此の市場に来て裁判鐘を眺めた、其れは非常に美しき鐘で殆んど太陽の如く金色に輝く程ピカ／＼して居つた、

『此の鐘の鳴るのを聞くのは何んなに嬉しいでしょう』と彼等は云

つた、

時に王が御出になつた、

『多分王様が御鳴しになるだらう』

と人々は云つて静肅に立ち王の爲さることを見やうとして待つて居つた、

然し王は鐘を鳴らさなかつた、王は其の紐を持とうともしなかつた王が塔の下に來た時立ち止まつて手を上げられて、さて云はれた、

『諸君よ、諸君には此の美しき鐘が見えますか？之れは諸君のです、然し用のないときには之れを鳴してはなりません、諸君の中誰れでも不當なことをされた時には何時でも來て此の鐘をお鳴しなさい、其の時には直ちに裁判官が來て其の事柄を聞き裁判を與へます貴賤老幼の別なく同じ様にしなさい、然し何人も不當なことをされたこと知らずに此の紐に觸れてはなりません』

the foot of the tower 塔の麓。

even take the rope in his hands 其の總を持たりさもなさらなつた。

except in case of need 用のないとき。

at once 直ちに。

half-way up the side of a steep hill 峻しき山の山腹 A long time ago 昔
hung up 掛ける。

此の後多くの年月が過ぎた、度々此の市場の鐘は裁判官を呼び出す爲め鳴つた、多くの罪惡は改良され、多くの悪人は罰せられた、終に麻の紐は殆んど切れさうになつた、其の下の方の部分は繕て解けてしまひ或は切れ果て、非常に短くなり只丈け高き人のみ達することが出来る位になつた、

一日裁判官は云つた、

「此れはで不可ぬ、若し小供が不當のことをされたらどうするのか？其の事を我々に知らしめるのに鐘を鳴らすことが出来ない、彼等は直ちに鐘の所に着る新しき繩を命じた、其の繩は地上まで垂れてるものにしなければならぬ、最も脊の低き小供にも達することの出来る様に、然し其れはアトリー中には無かつた、彼等は此れを得る爲めに山を越えて行かなければならなかつた、其れを持って来るまでには數日を要すだらう、若しも其れが来る前に大罪が爲されたら何うするだらう、其の害を受けたる者が古い繩に達することが出来なかつたら裁判官は何うして知るを得るだらう？」

其の傍に立つて居たのが云ふた

「私其れを着けましょう」

彼れは餘り遠くない所の彼れの庭に走り行く間もなく永き葡萄の蔓を以て歸て來た、

「これが繩の代りをしませう」と云つて登て行て其れを鐘に結び付けた、此の葉や卷鬚の着てる細長い葡萄の蔓は地上に引摺て居つた、
「うむ、これは極く良い繩だ、其れを繩として用ひよ」と裁判官は云ふた、

扱て村の上の丘陵に嘗つて勇敢なりし武士が住まつて居つた、彼れの若き時には諸國を乗り廻はし幾多の戰場に望んだ、彼れが始終に最上の友人としたのは馬であつた、其の馬は彼を幾多の危険から救た所

as it is 繩として。
not far away 遠くない。
with long grape-vine in his hands 永い葡萄の蔓を持って。
all that time 始終。
thought of nothing but gold, 金の外何人にも考へなかつた。

after this 此の後。
put on 着ける。
hung down 垂れる。
all Atri アトリー中。

の強康なる駿馬であつた、

然し此の武士が老人となつた時は最早戦場に乗り廻すことや、勇敢の事柄を爲すこと等には注意を拂はなくなつた、只だ彼れは金と云ことより外は何んにも考へなかつた、彼は吝嗇漢となつた、終に彼は身を除くの外彼れの持ち居る者總てを賣り拂つて小山の傍に小さな小舎に移り住んだ、日々彼れは自分の金袋の中に座して居つた、而して如何にして金を尙ほ得ることが出来るだらうと計畫して居つた、日々彼れの馬は屋根なき厩に半ば飢え寒さに慄えて立つて居つた、

『あの怠惰者の馬は貯蓄するに何んの利益があるだらう彼れの價値は一週間彼れを養つて居る方がもつとかゝるのだ、私は彼れを賣らふかしら、然し彼れを買う人は誰もあるまい、私は彼れをやることも出来ない、彼れ自身何うともする様に放ちてやろう、彼れは路傍の草を食つて居るだらう若し彼れが死ぬ様に飢えたなら尙結構だ』と或朝吝嗇漢

は獨言を云つた、

そこで勇敢なる老馬は不毛なる丘阪の岩の中を彼れの出来得る限り食物を探す様に放なれた、跛で病身なる彼れは塵りだらけの路をぶらぶらと歩き草やあざみの葉などを見出しては喜んで居つた、小供は彼れに石を投げ、犬は彼れに吠え付き、世間には彼れに同情を寄するものは一人も居らなかつた、

或る熱き午後のことであつた、誰も町には出て居らなかつた時此の馬は食物を求める爲め偶然と市場に來た、男も小供も其所には居らなかつた、太陽の熱は彼等を屋内に追ひこんでしまつたのだ、市場の門は廣く開いて居つた、哀れなる馬は、勝手に好きな所に行けた、彼は裁判の鐘に下つて居る葡萄蔓を見付けた蔓は未だ下げられた計りなので新鮮で青々して居たのである。

彼は瘦せた首を伸した、そうして甘まそうな一片を取つたそれは蔓

chanced 偶然と廻り會ふ。
all the people 總ての人々。

hill-side 丘阪。

in his youth 彼の若時き。

Day after day (One day after another) 日々。

keeping 貯蓄する。

he is worth 彼れの價値。

は獨言を云つた、
そこで勇敢なる老馬は不毛なる丘阪の岩の中を彼れの出来得る限り食物を探す様に放なれた、跛で病身なる彼れは塵りだらけの路をぶらぶらと歩き草やあざみの葉などを見出しては喜んで居つた、小供は彼れに石を投げ、犬は彼れに吠え付き、世間には彼れに同情を寄するものは一人も居らなかつた、
或る熱き午後のことであつた、誰も町には出て居らなかつた時此の馬は食物を求める爲め偶然と市場に來た、男も小供も其所には居らなかつた、太陽の熱は彼等を屋内に追ひこんでしまつたのだ、市場の門は廣く開いて居つた、哀れなる馬は、勝手に好きな所に行けた、彼は裁判の鐘に下つて居る葡萄蔓を見付けた蔓は未だ下げられた計りなので新鮮で青々して居たのである。

彼は瘦せた首を伸した、そうして甘まそうな一片を取つたそれは蔓

から離すのに困難であつた、彼は夫れを引張た、彼の上の大きな鐘は
鳴り初めた、アトリーの總べての人々は夫れを聞いた、それは斯く云
ふ様に聞えた、

人ありて邪事よこしまことを我にした、

オ、來ませ我事調べてよ

人ありて邪事よこしまことを我にして、

何故なれば此一人

オ、來ませ我事調べてよ

邪しま事をされた故

裁判官は夫れを聞いた、彼等は禮服を着けて熱い町を通つて市場に
やつて來た、彼等は此様な時に誰が鐘を鳴らし又鳴らす事が出來たの
だらう、彼れが門を通り越したときに老馬が蔓を噛つて居るのを見
た、

一人の者は叫んだ、

「嗚呼あれは吝嗇漢の馬だ彼れは裁判官を呼びに來たのだなせなれば
總へての人が知つてる如く彼の主人は彼を最も殘酷に取り扱ふからだ

put on 着る。
such a time 此の様な時に。

啞で非情の者が出來るだけの方法を以て事件を訴へたのだと他の者は
云つた、

『馬に裁判を與へてやれ』と第三の者は云つた、間もなく男や女や小
供の群集は裁判官が裁判をしようとして居るのは如何なる事件かを知
らうとして市場にやつて來た、彼等が馬を見た時不思議に思ふて靜か
に立つて居た、そこで今は彼の主人が自分の金の袋を家で勘定して居
る間食物も與へられず世話もされずに、ぶら／＼として居た彼に就て
見た事を話そうとした、

『行つて我々の前に吝嗇漢を連れて來い』と裁判官が云つた、

彼が來た時に彼等は彼等の裁判を立つて聞いているように命じた、

『此の馬は永年汝に能く使へて居た彼は永い間汝を助けた彼は又汝の
金を得るのを助けた、故に我々は汝の金の半分を彼に食物や彼に草を
與へる爲めの牧場老年に於ける彼を慰むべき暖き馬屋を求むる爲めに

he shall have justice 彼れに裁判してやれ。
Therefore 其れ故。
in wonder 不思議さうに。
for a many years 永年の間。

興へよ』と彼は云つた、
客舎は頭を下げて金の無くなるのを悲しんだ然し人々は喜こんで
叫んだ、そうして馬は新しき馬屋に導かれ永く彼が食べた事のないよ
うな食事をした、

第二十三章

如何にしてナポレオンが

アルプス山を越たるか

今より凡そ百年前ナポレオン、ボナパルトと云ふ英雄があつた、彼
は佛蘭西軍の指揮官であつた、佛蘭西は周圍の殆ど總べての諸國と戦
をした、彼は伊太利に自分の部下を連れて行かふと思つて居た、然し
佛蘭西と伊太利の間にはアルプス山と云ふ高い山があつて其頂上は雪
を以て覆はれて居るのである。

many a day 永ひ間。
to look at 視察さして。

「アルプス山を越ゆる事は出来るか」とナポレオンは尋ねた、

アルプス山を越す爲めに視察として送られて居た人々は彼等の首を
振つた、處で一人の云ふに

『それは越わられるであろうけれども……』

『よし……伊太利に進め』とナポレオンは云だ

人々は道のなきアルプス山を越す六十万人の軍隊を冷笑した、然し
ナポレオンは万事整頓せるや否を驗査し扱、彼は進行せよと命令した
のである、

軍隊、軍馬、大砲などの長き列は二十哩の延長に亘つた、彼等が前
方に道がないように見えた險阻の處に達した時に喇叭は(進めく)と
響き渡つた、ここに於て全員全力を盡した、そうして全軍は眞直に前
進した、

間もなく彼等は安全にアルプス山を越え、四日にして彼は伊太利の

France was at war with.....(France was fighting against.....) 佛國は……
と戦つた。

Let me hear no more(Shents no mars)もう云ふな。

gave the order 命令した。

to go farther 前方へ行く。

平源を進行するに至つた、

『一度勝つと決心した男兒は決して不可能と云ふな』とナポレオンは云つた、

第二十四章

シンシナツチの話

嘗つてシンシナツチと云ふ人があつた、此人はローマから余り遠くない處の小さな田舎に住んで居た、彼は曾つては金持であつた、彼の國の最上の官職にも昇つた、然しどうした譯か彼は財産を總べて無くしてしまひ、今は畑へ出て仕事を爲さなければならぬ程貧しくなつた、然し彼は當時土塊になるまでも高尚にして居ろうと考へて居た、シンシナツチの賢く、正しかつた事は總べての人が彼を信用し彼の

over the Alps アルプスを越える。
one way or another(in some way) 何うか。
in those day 當時。
what to do 如何にすべきな。

忠告を聞く程であつた、何人も思案に餘つて何うして可いか分からぬ時には其近所の人は云つた、

『シンシナツチの處へ行つて相談せよ彼は汝を助けるであらう』

此處にローマ人と戦をして居た山中から余り遠くない殆ど野蠻に近い恐ろしき種族が棲んで居た、彼等は自分達を助けるために勇敢なる他の種族を説得した、そうして市街に押寄せ來て掠奪をしたり盜賊を働いて居た、彼等はローマの境を破り家を焼き總べての人を殺し女や子供を奴隸にしてやること大言を吐いて居た、

非常に豪慢、勇敢なるローマ人は最初は餘り危険だとも考へて居なかつた、ローマに於ける總べての人は軍人である。今盜賊と戦ふ爲めに出て行つた軍隊は世界に於て最も優れたものであつた、婦女と小兒と共に國に止ましたのは町の立法者で父と呼ばるる白髮の老人の外に城壁を守る少數の兵士のみであつたが。總へて此の人々は山族を彼等の

to help 助ける。

居る所からして追ひ歸してしまふことは易い事だと考へて居た、

然し或朝五人の騎兵が山からして遂に下つて来た、彼は非常に速に走つて来た、人も馬も塵と血で覆はれて居た、門の番兵は彼等を知つ居た彼等が駆け込んだ時に彼等は叫んだ、なせ斯く疾走するのかローマの軍隊に何事が起つたのか、と。

彼等は彼に答へなかつた、彼等は町に入り静かな町を去つて行つた總べての人は彼の後に走つてどうした事か知ろうと熱望して居た、當時ローマは大都會ではなかつた、彼等は間もなく白髪の父が坐して居る市場に到着した、そこで彼等は馬から下りて物語つた、

「たつた昨日の事であつた、我軍隊が險しき山の間の狭き谷を進軍して居ました時突然我々の前に或は土に或は岩の間から數千の蠻民飛び

the men of mountain 山人共。
galloped in 駆け込む。
All at once 直ちに。

出して来た、彼れは道を鎖ざし通路は狭くて戦ふ事が出来ぬ我々は歸ろうとした、然し彼等は又此方の道も鎖ざしてしまつた、勇敢なる山族は前、後、頭上より岩を投げ落した、我々は罅に落ちたのだ、我等が十人は馬に柏車を當てた、我等五人は道を通し来たが他の五人は山族の鎗に斃れた、オ、ローマの父よ今直に我々の軍隊を助けて下さい總べての人は殺されるでせう又我々の町は奪られてしまふでせう」

そこで白髪の父は、

「どうしよう番兵や小供ばかりだが誰を送る事が出来るであらう兵士を指揮しローマを救ふ人は誰であらう？」

彼等は總べて首を振つた、そして非常に沈痛な顔付きであつた、なせなれば望がないように見えたからだ、時に一人が云つた、

「シナンナツチを送れ彼は我々を救ふだらう」

to find out 知らうと。

only yester-day たつた昨日であつた。

What shall we do? どうしよう whilt-haired 白髪の。

彼を迎ひに来た人々は大急ぎでやつて来た、時にシンシナッチが畑で耕して居た彼は仕事を止めて彼等に丁寧な禮をした、そして彼等の話す事を待つて居た、

「外套を着て下さいシンシナッチよ、そうしてローマ國民の願を聞いて下さい」

シンシナッチは是等の言が何の意か解らなんだ。

「ローマ國は安全なのか」と彼は聞いた、そうして外套を以て来るように彼の妻を呼ばた、

妻は外套を以て来た、シンシナッチはその塵を拂つて夫れを着た、そこで人々は使命を話した、

彼等は山を越す時に罾にかゝつたローマの高貴の人々の有様や、町が非常に危険だと云ふ事を話したそこで又曰く、

「ローマの人々は貴殿を、思ふままに支配する權を有する、軍司令官及市の知事に任じ且つ父は貴殿が直に来又我々の敵即ち恐ろしき山族に向いて行くやうにと願つて居る、」

そこでシンシナッチは彼の居た處に鋤を捨て、町に急いで行つた、彼が町を通過しこれくの事を爲さなければならぬと命令を與へた時に或る人々は恐れた、なせなれば彼はローマで最上の權力者であり彼の願ふ處の事は何事も爲さなければならぬと云ふ事を知つて居たからである、然し彼は番兵や小供に武装をし自分が彼等の大將となつて恐ろしき山族と戦かつた、そうして罾にかゝつて居たローマ隊の軍を救助した。

二三日後にローマに非常に喜ばしき事があつた、シンシナッチからの好き報せがあつた、山族は非常に打破られた、彼等は自己の領地に走せ歸へつた、と。

ruler of their city 町の指揮者。
A few days after-ward 二三日後。
shall be done 爲さなければならぬ。
armed 武装した。

send for 送る。
plowing 耕す。
in great haste 大急ぎで。
put on 着る。

而して今小供や番兵と共にローマの軍隊は軍旗を翻かへしつゝ、凱旋の叫びを以て彼等の家に歸つて來た、そして彼等の先頭にはシンシナッチが馬に乗つて居た、彼はローマを救つたのである。

そこでシンシナッチは彼自身王になる事も自由であつた、何となれば彼の言葉は法典であり、そして誰も彼に對して敢へて指を指すものになかつたからである、然し彼は人々が彼の爲した事に對して十分感謝もなさない中に權力を白髮のローマの父に返して彼の小さな畑に歸り再び鋤を取つた、

彼は十六日間ローマの指揮を取つたのみである。

第二十五章

レギユラス物語

羅馬より海を越えて向ひ岸にカーセージと名づくる大都が嘗てあつ

lift a finger 指を指す。
gave back 返す。

た、羅馬人が此カーセージの人々憐善の好更に無く、遂に兩者の間に戦端が開かれた、ドチラが強いかと云ふことは永い間判らず先づ羅馬人が一戦争に勝つと、次はカーセージの人々が勝つこととなり、斯くて戦争は多年打ち續いた、

羅馬人中レギユラスと呼ぶ勇敢なる大將があつた、噂によると其人は嘗つて約束を破つたことが無かつたさうである、或る時レギユラス偶然捕虜となりカーセージに運ばれた、身體が悪ければ寂びしくもあり彼は海を越えて遙か隔たれる妻子のことを夢みた、再び之等の人に逢ふことは彼に取つて殊に望み渺いことであつた、然し彼の第一の義務は彼の祖國に對するものである、それで彼は此慘酷なる戦に戦ふ可く萬事を放擲した、

尤も彼は一戦に敗れ捕虜となつた、然し彼は羅馬人が着々歩を進め、カーセージ人は遂には敗られるを怖れることを知つた、カーセー

gaining ground 着々歩を進める。
went on 繼ぐ。
broke his word 約束を破る。
for a long time 永い間。
prove the stronger(win) 勝つ。

チ人は他國に使を遣し自己を助く可き兵士を雇つた、然も之等の雇兵を以てしても彼等は永久羅馬人と戦ふことが出来なかつた、

一日カーセーチのある統治者がレギエラスと語る爲に牢獄を訪ふた、

彼れ曰く

「我々は羅馬人と平和を結ぶのを好む、若しお前の本國にある統治者が戦況を知つたならキツト我々と平和を結ぶのを喜ぶに違いない、私達は若しお前が我々の云ふた事をするならお前を自由にして國に歸へして遣らう」

「如何な事か」

「先づ第一に羅馬人にお前達の敗戦を告げ、彼等が此戦争により何等得るところ無きを明に知らして呉れ、ばよい、それから第二には若し彼等が平和を結ばないなら、お前は再び此牢獄に立ち歸る約束をして

in the end 終には。

come back 歸る。

to make peace 平和を結ぶ; in the first place 第一に。

呉れ、

「よろしい、若し彼等が平和を結ばなきや私は牢獄に歸つて来る」

彼等は彼を放つた、何故なれば大羅馬人は約束を守ると云ふことを彼等は知て居たから、

彼れが羅馬に歸て來た時人々は喜んで向へた、

再び別れるだらうと云ふことは知らなかつたから彼れの妻や小供達は非常に喜んだ、此の市の爲めに法律を作つた白髮の父は彼れに會ひに來た、彼等は戦争の様子を彼れに問ふた、

「私は平和を結ぶと云ふことに就き貴殿に乞ふ爲めカルザージより送られたものです、然し平和を結ぶことは賢なることではない、然り、私は或る二三の戦には敗れたれども我々の軍隊は日に月に優勢を占めて居るのです、カーセージの人々は彼等に占領されるだらうと恐れて居ります、乞ふて戦争を繼續したならカーセーチは我國のものになる

keep his word 約束を守る。

in a few battle 二三の戦に於て。

でしよう、私にとつては妻や小供やローマに別れを告げに来たのです
私は約束を履行する爲め明日カーセーヂに行き牢獄に歸るのです』と
彼れは云ふた、

そこで父は彼れに止まる様に説得した、

『汝の代りに他の人を送らう』と彼等は云つた

『羅馬人は約束を守らない宜いでしょうか』とレギユラスは問ひ且つ

『私は病氣です、とても永くは生きないのです、私は約束通り歸りま
す』

彼れの妻や小さな小供達は泣き、彼れの息子は再び行かない様に願
つた、

レギユラスは曰く

『我は約束したのである。他の事は人々が世話して呉れる』

そこで彼等に別れを告げて潔ぎよく牢獄に歸り彼れが豫期して居つ

た惨酷なる死に就いた、

之れ實に羅馬を世界一つの大都となした勇敢なる美談の一つであつ
た、

第二十六章

コルネリアの寶石

羅馬の舊都に於て數千年昔の或麗しい朝のことであつた、美しい花
園の中の葡萄の蔓に被はれた阿屋の中に二人の男兒が立つて居た、兩
人は花や樹の間を散歩する母と母の友達を眺めて居たのである、

幼い方の小供が背の高い兄さんの手を引いて

『お母さんのお友達ほど美しい人は見たことが無いな……まるで女
皇様だ』

と云ふと年上の兄弟が

as for me 私にとつては。
at the best よくいつでも。
The rest will be taken care of 他の人々が世話して呉れる。

『だけれど僕等のお母さんほど美しくかない、成程あの人の衣服は美
くしい、然し顔付が氣高くも親切らしくも無い、女皇のようなのは僕
達のお母さんだ』

弟が云ふには

『そうだ、私達のお母さんほど女皇らしい女は羅馬中にありやしな
い』

間もなく彼等の母コルネリアは小供達と語る爲にやつて来た、白の
無地の衣裳を着け腕と足は當時の風習として裸出し環や鎖が其手や頸
に輝いては居ない、冠としては長い柔な褐色の毛髪が編まれて頭上に
捲かれてあるそうして小供達の誇れる眼に見入る彼女の氣高い顔には
やさしい微笑が現れた。

『ふたりにお話して上げることがありますよ』

羅馬の少年が教えられてある通りに兩兒は母の前に禮をした、

『お母さん、それは何んです』

『二人共今日は私達と會食しなければなりません、此花園の中で……
そうすると私達のお友達が、みんながよく聞く寶石の不思議の小箱を
見せて下さいます』

兩人の小供は恥し相に母の友達を眺めた、此の女が自分の指に穿め
てる以外に猶指輪を持つて居るか知らん、頸の周圍の鎖にキラ／＼し
居る寶石以外に他の寶石を持つて居るのか知らん？

簡單の屋外馳走が済むと下僕が小箱を家から持つて来た、貴婦人が
これを開くと緊爛たる寶石の光が小供の眼を眩さんばかりなり、眞珠
の紐がある、牛乳の様に眞白で繻子の様に滑かだ、ピカ／＼するルビ
ーが山の様にある、まるで燃わ立つ石炭のように紅い、夏の空のよう
に青いサファイアーもあれば日光のように輝く金剛石もある

兄弟は永く此寶石に見入つた

syhyly 恥し相に。

to dine with us 私達と會食する。

you heard so much みんながよく聞く。よく噂する。

It is true 成程、眞實だ……此所では反語なり。

vine-covered 蔓に被はれたる。

the custom in those days 當時の風習。

a plain white robe 白の無地の衣裳

for her only crown 冠としては。

若い方が囁つた

『あゝお母さんにこんな美しい物があつたらねね……』

然し遂に此の小箱は閉ざれて注意深く運び去られた

母の友人が

『コルネリアさん、あなたに寶石が無いのはほんとうなの、貴女が貧乏だつた傭く人がありましたそりやほんとうなの？』

『いゝね私は貧乏じゃありません』

と小供達を傍に引き寄せて

『茲に私の寶石があります、貴女の凡ての寶石より価値があります』

恐らく兩人の小供達は此母の誇り、愛、注意を忘すればしまい、其後兩人が生長して共に羅馬の偉人となつた時に彼等はよく花園の中の此の光景を思ひ出した、そうして世界の人は今も猶コルネリアの寶石物語を聞くを喜んで居る

aut door meal 屋外の馳走。

the brother looked long at the gems 兄弟は永く寶石に見入つた。

to her side 彼の傍に。

I am sure 恐らくは。

in after year 後年。

第二十七章

アンドロクラスと獅子

昔羅馬にアンドロクラスと呼ぶ奴隷があつた、主人が慘酷な人で余り自分に不親切なものだから遂に遁亡した、

數日間は森に身を隠くしはしたものの、食ふものが更にないので身體は次第に衰弱するばかり、遂には死にはしないかと思はれる程の病氣となつたので、ある日のこと洞穴の中に這ひ込んで身を横へ間もなく熟睡に陥つた。

暫くすると大きな音がするので眼を醒ますと、一匹の獅子が洞穴へ這入つて来て、聲高く唸つて居る、アンドロクラス驚きまいことか、もう自身は此猛獸に殺されると観念を極めた、然し間もなく獅子が怒つて居るのでなくて何んだか足に惱あるらしく跛行するのを認めた、

After a while 暫くするご。

run away 遁亡する。

for many days 數日間 fast asleep 熟睡。

そこで、アンドロクラスは大膽にも獅子のチンバの足をば捕えて、ドウした譯かと思つた、獅子は穩しく立ち其頭をば男の肩にコスリ付けた、其の様子が如何にも

『お前が私を助けて呉れることは知つて居る』

と云ふ風だつた、

アンドロクラスは獅子の足を土地から持ち上げて長い鋭い棘が獅子を惱まして居るのを見た、そこで棘の一端を指に摘み強くキュッと之を引き抜いた、獅子は大喜悦の體で犬コロのように飛び廻り新しい友人の手や足を舐めた、

之れからと云ふものはアンドロクラスは更に怖るゝ所がない、夜になると兩者相並んで睡むつた。

獅子は永い間毎日くアンドロクラスに食を運び兩者は仲のよい友達となりアンドロクラスは自分の新生涯を幸福のものと思つた。

一日此森を通過する兵士達が洞穴の中にアンドロクラスを見つけた、彼等はアンドロクラスの誰なるかを知り之を羅馬に連れかへつた。

當時の法律として主人から逃走した奴隷は餓れた獅子と闘はなければならなかつた、そこで猛烈なる獅子が暫ばし餌無しに閉ぢ込められた闘争の時間が定められた

其の日になると數千の人が此遊戯を見んとて集つた、彼等のかゝる場所に赴くや猶現今の人々が興行や野球戦を見に行くと同様であつた戸が開けられた、憐なるアンドロクラスは運び入れられた、獅子のウナリがもう耳に入るので彼は恐怖に打たれて殆んど死んで居た、ふと見上げると自己の周圍の數千の人には只一片哀憐の情も見えない。

次で餓獅が突入した、一躍して哀れなる奴隷に近付いた、アンドロクラス大聲は發した、其れは恐怖の叫聲ではなく喜悦であつた、其

side by side 相並んで。

For a long time 永い間。

brought in 運び入れられた。

almost dead with fear 恐怖に打たれて殆んど死んで……

When the day came 其の日になると now a day 今日の日。

He seemed to say 其の様子が如何にも……と云ふ風だつた。
took him back to Rome 羅馬に連れ歸つた。

の獅子は實に彼の舊友洞穴の獅子だつた

獅子に殺される男を見ようと待ち構へた人々は不思議の念に満たされた、見ればアンドロクラスは其腕を獅子の頸部に捲き付け、獅子は其足下に横はつて其足をなつかしうに舐めて居る、巨大なる猛獣が其頭を奴隷の顔にサモ可愛がつて、貰ひたさうに擦り付けて居る、見物は何が何だか此場の譯が判らない。

暫くして見物はアンドロクラスに此場の譯を尋ねた、そこで彼は衆の前に立ち腕をば獅子の頸に捲き付け乍ら如何に自分と猛獣が洞穴に棲息したかを告げた

『私は人間です、然し私を世話して呉れる人としては更に有りませんでした、此可哀相な獅子は只一人私に親切にして呉れました、私達は兄弟のように愛し合つたのです』

見物は此上惨酷なるほど悪性ではなかつた

After a while 暫くして。
lie down 横たはる。
They could not understand what is all meant. 見物は何が何だか此の場の譯が判らない。

『生き残れよ、自由なれ、自由に生き残れよ』と叫んだ
他の人々は叫んで曰く

『獅子も自由にして遣れよ、彼等兩者に自由を與へよ、

斯くて、アンドロクラスは自由となり獅子は彼の所有にござと與へられ其後多年兩者は共に羅馬に棲息した。

第二十八章

橋に於けるホラティウス

嘗つてローマ人とタイバー河の向側の都會に住んで居たエトルスカンの戦ひがあつた、エトルスカンの帝王がボルセナ大軍を起しローマに進軍した、市は曾つて此の様な危険に陥た事はなかつた、

ローマは此時多くの軍人がなかつた、公然たる戦ひに於てエトルスカンにと會戦しては適はないと云ふ事を知つて居た、夫れ故に彼等は

each other 互に
for his own. 彼れの所有に。
not strong enough かなはない。

城壁の中に閉じ籠り道に番兵を置いた、

或る朝ボルセナの軍隊が北の方から山を越えてやつて来るのを見た、騎兵歩兵の數千騎あり、彼等はローマの河に架けてあつた木の橋の方に真直に進んで来た、

ローマ人の爲めに法典を作らへる處の白髮の父は云つた、

『どうしたら可いだらう若しも彼等が橋を占領したならば我々は彼等の横ぎつて来る事を防ぐ事が出来ない、然る時には早や何の望があるだらうか』

扱て橋の番兵の中にホラティウスと云ふ勇敢なる人がある、彼は河の向ふ側に居た、そうしてエトルスカンが非常に近づいて居るのを見た時に彼の後に居たローマ人に叫んだ、

『出来るだけの速力を以て橋を切り落して呉れ、私と私の傍に居る二人とで敵を喰止めよう』

そこで敵の前には楯と手には鎗を持った三人の勇士が道に立て居て、橋を取りに送られたボルセナの騎兵を追返した、

ローマの橋は横梁や柱のみに落されてしまつた、彼等の斧は鳴り木の屑は速かに飛び間もなくそれは震動し倒れる斗になつた、

『歸へれ〜君等の命を救へ』とホラティウス及び彼と一所に居た二人の者に人々は叫んだ、

然し其時にはボルセナの騎兵は再び彼等に突進して来た、

『走れ〜我は此道を守る』とホラティウスが彼の友達に云つた。

彼等は橋を渡つて走り歸へつた、彼等が向ふ岸に漸く到着した時横梁や材木の碎けた音が聞いた、橋は一方に顛覆し遂に水の中に恐ろしき音をして落ちた、

ホラティウスが此音を聞いた時彼は市が安全であると云ふ事を知つた、彼は靜かにボルセナの軍の方に向つて彼が河の土手の上に立つ迄

at bay 喰止める。

stand by 傍に居る (助けるを云ふ意あれども此所にては傍に居るを云ふ方至當ならん)

run back 走り歸へる。

with his face 顔を向ける。

on the other side of The Tiber River タイバー河の向側。

farther side of river 向岸。

so near 非常に近く。

If they once gain the bridge 若しも彼等が橋を占領したならば。

そろ／＼と後へ返つた、ポルセナの兵士の一人の投鎗が彼の左の眼に當つたけれども彼は躊躇しなかつた、彼は真先の騎兵に彼の鎗を投げた、そこで彼は駆け廻た、彼は流の向ふ側の林の中に自分の家の白い門を見た、

斯かるローマの城壁に

沿ふて流るゝ水の瀬の

床しき河を彼愛でぬ、

オ、タイバーよタイバーよ

あゝファザータイバよ

御身よ、ローマの命をも

ローマの國のいさをしも

頼む御身にけふの日を

彼は深くそうして早き流の中に飛び込んだ、彼はしつかりと重き具

足を着けて居た、そうして彼が沈んだ時に再び彼を見ると云ふ事は何人も思はなかつた、然し彼は達者であつた、彼はローマに於ける最上の水練家であつた、間もなく彼は立つた、彼は半ば河を越して居た、そうしてポルセナの兵隊が彼の後から投げる鎗や投鎗はもう達しなかつた、

間もなく彼は彼の友達が助けようとして立つて居た向ふ岸に到着した、彼が土手に這ひ上つた時味方は非帯なる鬨聲を以て彼を向へた、ポルセナの人も叫んだ、なせなれば嘗て斯くホラテウスの如き勇敢にして強い人を見た事がないからである、彼はローマの外に彼等を防いだ、彼は彼等が賞讃の外何事も爲す事が出来ないような行爲をなした、

ローマ人は彼が彼等の町を救たと云ふ事に就てホラテウス像に非常なる感謝をなした、彼等は彼をホラテウス、コクレタと呼んだ、

out of Rome ローマの境外。
sank out of sight 沈む。
shout after shout 非常な鬨聲。

此意味は片眼のホラティウスと云ふ事だ、なせなれば彼が橋に於て防いで居る時に彼の眼を失つたからだ、彼等は彼の名譽の爲めに眞鍮の美しき像を作つた、そして彼等は彼が一日に耕す事の出来るだけの土地を興へた、そうして百年以前に於ても次の如くであつた、

笑みつ、嘆げきつ、今も尙

古へ人のホラチスが、

建けげに猛き功績は

語り傳へて残るなり。

第二十九章

ジュリアス、シイザア

約二千年ほど昔ジュイリアスシイザアと呼ぶ人が羅馬に棲んで居

one-eyed 片眼の。

た、彼は全羅馬人中の最大偉人だつた

何故彼はそんなに偉かつたのであろう？

彼は勇敢なる戦士であつて羅馬の爲に多くの國を征服した、計畫も
うまければ實行も巧だし、如何にして部下をして自分を愛せしめ怖れ
しめ得るかを心得て居つた。

遂に彼は羅馬の統治者となつた或者は彼れが王たるを望んだと云ふ
た、然し當時の羅馬人は國王なるものを信じなかつた。

嘗つてシイザアがある田舎の村落を通過する時に、其土地の男女
小供は皆彼を見んとて出かけた、と云つても總數五十人を越わな
いで市長に率ひられ其市長が各に斯くせよと告げるのであつた

之等質朴なる人々は路邊に立つてシイザアの過ぐるを見守つた、
市長はさも誇り顔に幸福らしかつた、無理ならぬ話で彼は實に此村落
の指揮者ではないか彼は實に自をシイザアの如き偉人の如く思つた

in king 帝王なるものを。

in planning 計畫に於て。

rules of Rome 羅馬の統治者。

simple people 質朴なる人民。

昔しデヲニシアスと謂ふ一人の王があつた、で此王様は余り行ひの正しくない、そして残酷な人であつたから時の人は桀紂に等しい暴戾なる王として恐れて居つたのであつた、デヲニシアス王も亦自ら其衆人より嫌悪されて居る事を知り、屹度誰れかが己れに危害を加へるだ

で、膝ついてうめいた、
『萬事休す、嗚呼已矣哉！』
然しシイザアーは怖れないで、船長に起き上つて再び櫓を執るよ
うに云つた
『一體君は何故怖れるんだい、ボートは無くなりやしないよ、シイザ
アーが乗つかつてるから……』

第三十章

ダモクルスと劍

all in lost 萬事休す。
he won for himself the name of tyrant, he won for himself 己 Receive
さ同じ意にして衆人より暴君なる名を附せられた。
in dread lest = for fear that.....を恐れる。
a host of servant 大勢の召使ひ。

のである

シイザアーと共にありし美くしい士官の或者は笑つて
『彼奴が小群の先類に立つて威張て歩んでることよ！』
と云ふとシイザアーが

『お前達は勝手に笑ふがよい、彼奴が威張る理由がある、自分も羅馬
で第二番目の人となるよりは此中で一等の人になりたいわい』
と云つた、

又或時のこと、シイザアーがボートに乗つて狭い海を渡つたことが
ある、向ふ岸遠ほき渡りを半ば来た頃に暴風雨が起つた、風は強く吹
く、波は高まる、電光は閃く、雷鳴は轟く！

一分毎にボートは沈まんばかり、船長は非常に恐れた、彼は此海を屢
々横きつたことがある、然し未だこれほどの嵐に出つくはしたことが
ない、怖ろしいので身が慄へ、もうボートを指揮することも出来ない

laugh as you will お前達は勝手に笑ふがよい。
to be proud 威張る。
At another time 又或時のこと。
overtook him 起る。
in great fright 非常に驚く。

らふと謂ふ事を常に恐れて居つたのだ。此デオニシアヌ王は其家が非常に富み榮えて居つて、常に大厦高樓に住み、金銀財寶山の如く、翠黛の匂ひ艶なる三千の宮女が彼に侍りて實に人世無上の榮華を恣にして居たのである、所が或日の事ダモクルスと云ふ王の友達がやつて来て、王に謂ふのに

「君は實に幸福な人だ、君は各人が欲する總ての物を持つて居る、實に羨しく思ふよ」

王之に答へて云ふには

「君は一日たりとも僕のような幸福な身分になつて見たいだらふ」
するとダモクルスが云ふのに

「イーヤ、そう云ふ話じやない、が併し若し余にして君が持つて居られる富と歡樂を唯一口でも享有する事が出来れば、之を以ては僕無上の幸福とするのだ」

此に於て王の曰く

「夫は御安い御用だ、君は我が富と歡樂を一度享けて見給へ」と

次の日になりてダモクルスは宏壯なる殿上に導かれ今まで王に仕へて居つた幾多の臣下は皆鞠躬としてダモクルスに奉仕したのだ、でダモクルスは宴會場の玉座に坐し、山海の珍味は食卓の上に並べられて居り、彼は意の儘に總ての快樂を享け、口腹の慾を充すに足る高價なる葡萄酒より、艶を競ふ花卉、馥郁たる清香、妙なる音樂の如き實に極樂も斯くの如きかと計りに思はれたのであつた、でダモクルスは柔き褥の上に坐を占めた時に彼は之を以て此現世で享け得べき最大幸福を自己一身に集めたものと思つたのであつた

身夢境に遊んだのじやないかしらんどばかりに疑つて、不圖天井を眺めると、こはとも如何に、ダモクルスの頭上に觸るるに垂んとせる何か鋭利なものが釣り下つて居るのだ、でダモクルスは怪み乍ら瞳を凝

you shall have them = you many take them

Nothing was wanting that could give him pleasure = there was everything to give him pleasure 何物も不足なし。

『如何にも君の頭の上には劍が釣されて居る、そして夫れは何時落ちて来るかも知らない、併し何を以て君は爾く驚き惑ふのであるか、余が周圍には余に危害を加へんと常に附けねらつて居るものがあるのだ、だから常に劍を頭の上に釣るしてあるのである』

ダモクルス曰く

『噫、去らんかな、余は誤てり、今に於て始めて富と權力なるものがさして幸福なものじゃないと謂ふ事を悟つた、余は針の蓆に座りつつ人生の榮華を盡さんよりも去つて山中の我が故郷に立ち販り、いぶせき伏屋の中に我が余生を樂まん、』と

彼は敢て富をも希はず、一瞬間たりとも再び王位について見やうと謂ふ心も起さず、一生を安樂に送つたと謂ふ事である。

So long as he lived = in his life, 如き意にして彼の生涯中。

らしてよく見ると夏尙寒き三尺の秋水が僅に細い馬の尾一本で釣されて居るのであつた、ああ、若し此馬の尾にして切斷よれば如何になるだらふか、而して此危機は刻一刻と迫り行くのである、

事此に至りては人生の榮華に耽つた歡樂の微笑もダモクルスの唇頭より消に去らなければならぬ、果然彼の面色は見る／＼土の如くなり、手は恐怖のために縮み上つて、最早や山海の珍珠も食ひたくはない、最早や酒は喉頭を通らない、天來の音楽も亦聞きたくはない、そして彼は一刻も早く宮殿を出で、曾ては自分が嫌だ／＼と思つた其所郷へ歸りたくなつたのである

王は「一體君はどししたのか」と問ふとダモクルスは言下に「あの劍「あの劍」と叫び出し、驚きの余りに腰を抜かしたのか一寸動きもしない、

此に於て王の曰く

what if, what は what would happen, の意にして如何になるだらう。
he cared not where = where he cared not before にして前には何れも思つて居らなかつた所即故郷の事。

第三十一章

ダモン—フ井シアス

此にフキシアスと謂ふ若い人があつて暴君デオニシアスの意に障る様な事をした王は非常に怒つて此罰として彼を監獄に禁錮し遂に死刑に處せらるべき日さへ定められた、此フキシアスの生れ故郷は都を去る遙か遠方で、ゴ—が自分が死罪に處せられない内に今一目父母、故舊に遇ひたいものだと思つて居つたのである、此に於て彼は王に『ゴ—が宅に皈つて父母を始め、私が敬愛して居る人々に今生の暇乞ひをしたいから、少しの暇を下さい、私は暇乞ひさへ濟めば直ぐ此處へ皈つて來まして、御處刑を受けます』と哀願した。

すると王は冷かなる笑を浮べて、

to be put to death = to be killed 殺される。
 he wanted o very much.....=he desired earnestly.....
 give me leave to go = give me leisure to go 暇を呉れ。

『余は如何にして汝が汝の約束を違へざるを得べき、汝は余を欺き自ら逃げんとするのだらふ、不屈者奴』と奴鳴りつけたのである、すると側に居つたダモンと謂ふ青年が王に叩頭して

『大王よ、ゴ—をフキシアスの身代りとして私を牢に入れて下さい、そ—すると彼は自分の故郷に行つて萬事の片付けをなし、知己故舊にも暇乞ひをする事が出来ませふ、私は彼の決して約束を破る様な男じやない事を知つて居ります彼は必ず此處へ歸つて來しませう、併し彼が若し約束の日限までに歸つて來ない様な事があれば私は彼に代つて潔く御處分を受けませふ』と云ふた。

流石の暴君デオニシアスも驚いて遂にフキシアスをして一先づ故里に歸省するを許し、其歸るまでダモンを冷き鐵窓に繋いで置く様にと命令を下したのであつた。

夫から段々月日もたちフキシアスを死刑にする定めの日も一日一日と

to put his affair in order は諸事を整理する。
 in his stead=in stead of him
 ly and by 次第次第に。

迫つて来た、が本人は一向歸つて来ない、王は仕様事なしにダモンを嚴重に監禁して置く様に看守に嚴命を下した、ダモンは敢て逃げ様をもしない、實にダモンは其友フキシアスの信實にして而も廉恥を重んずべきを尙信じて居るのであつた、彼の曰く『若しフキシアスが其日まで来ない様な事があれば、夫は決して彼の過失ではないので、側の者が彼を抱き止めて去らさないのに違ひないのだ』と、

遂に處刑の日が来た、處刑されんとする其時刻ともなつた、憐れなるダモンは將に死罪を行はれんとし、其準備をして居るのである彼は神色自若として尙彼れの友人フキシアスの前約を違へざるを信じて疑はず、更に自分は己れが長敬せる人のために如何なる苦痛を受けても悲しくはないと謂つて居るのである、

憐むべし、彼は遂に看守に引き出され、將に斷頭臺に行かんとする其刹那、出會頭にフキシアスが戸の外に立つて居つた、實にフキシアス

drew near 迫る。
very hour 處刑さるべき定めの時刻。

は途中暴風雨や難船に遇つたので斯くも歸るに暇がとれたのであつた、而して彼は一に定刻までに歸る事が出来ないだらふかと謂ふ事を非常に憂慮して居つたのである、

茲に於ては彼れはダモンに親切に挨拶をし、自ら手を後ろにして看守に身を委ね、兎に角後れながらも時に間に合つて来た事非常に楽しんで思つたのである

デオニシアス名は暴君と呼ばれて居るが他人の善行をも見分ける事が出来ない程の悪人じやないのであるから、彼はダモンとフキシアスの間に於ける如く斯くまで兩人が相愛し相信じて居るものに對し苛刑を加ふるの甚だ道ならざるを知り遂に兩人を許し、尙「余は斯の如く相信じ、相疑はない朋友を得る事が出来れば余は余の富を換えても惜しくはない」と謂つたそうである、

he was too late—he was not in time 間に合はぬ。

第三十二章

ラコニツクの答

羅馬を去る數百里の所に希臘と呼ぶ名高い國がある、此希臘は其人民が羅馬の様には一團だんとなつて居らない、數個の州に分れ、各其主權者を頂いて居るのだ、

此國の南部地方に住むで居る人民の中にスバルタ人と謂ふ人種があつて其奇なる風俗習慣と其勇敢はよく世間に知られて居るのだ、而して此スバルタ人の住める地方はラコニアと稱する所から或は一名ラコン人とも呼ばれて居る、

此人種の間存する風習の中に、相互の談話は簡單を尙び、余計な事は謂つてはいけなると謂ふ様な事がある、だから極く簡單な答はラコニツクだと謂ふ異名を取つて居る位で、つまりラコニア人は非常に答が簡單であつたからなのだ、

A laconic answer 寸簡的返答。

many miles beyond=many miles far にして距る。

they should speak の should は must と同意。

第三十三章

思知らずの客

又希臘の北部にはマセドンと呼ぶ地があつて、曾てフェリッブと謂ふ戰爭好きの王が此土地に君臨して居つた事があつた

マセドン王フェリッブは全希臘の皇帝たらん事を欲し、遂に大軍を發して他州を攻撃し、殆ど全國の諸州は大王として彼を仰がざるべからざる様になつたのである、茲に於て彼はスバルタ人に『若し余は大軍を提げ汝の國に至れば之を全く平定せん』と謂ふ如き書を送つた。

三四日たつと返書が來たから、封を切り、さて讀まんとすると(一)なる一字が書いてあるばかりであつた、而して此意は『王の進路に於てイフなる字の存在せる限りはスバルタ人は決して王を恐るるものにあらず』と云ふのであつた、

フェリッブ王麾下の兵士の中に以前は随分勇敢な働をした貧しい人

Ruled over=governed にして支配される。

I will level your great city to the ground 汝の都市を平坦にするといふ意にし國を平定する事なり。

It was as much as to say=It is equal to say にしてこゝ云ふのと同様であるの意。

more ways than one=various way にして種々の方法。

があつた、此兵士は色々な方法で王を喜ばしめ、従つて王の信任も亦甚だ厚かつた、

或日の事此兵士が船に乗つて航海して居つた時に大暴風に出遭つた、で遂に船は岩礁に乗り上げて、難破し、此兵士は殆ど半死の體で以て海岸に打ち上げられ、近く住める一農夫の親切な介抱で命だけは取止めたのである。

彼は充分回復して將に故山に歸らむとする時に農夫に向つて厚く今まで介抱して呉れた親切を謝し、屹度此厚意には報ゆる時があらふと約束した然るに此兵士は敢て此然諾を守らむとはせず、王にも瀕死の際助けて呉れた農夫の事に就きては一言の話さへせず、單に其海岸の近傍には實に立派な土地があり、あゝ謂ふ所を自分の所有地として見たいと謂つて、王に之を下さいと懇願したのだ、王は『其土地は何者の所有地であるか』と聞くと彼の答へて曰く『夫は國家のために殆ど何

was on board of a ship at sea=was sailing at sea にして航海して居るの意。

drove upon=struck against にして乗り上げる。

had it not been=If there had not been にして……無かりせば。

he did not mean to keep……は約束を守る積りがなかつた。

事も功献し得ざる無智盲昧の一農夫の所有である』と申し上げた、すると王は『汝は長らく我がために盡して呉れた其功により、今汝の願望を協かたへてやらふ、去つて其地を所有せよ』との難有い仰が下つた。

此に於て兵士は其地に急行し、曾て自分を助けて呉れた農夫を家から追ひ出して、無理無體に其土地を奪取して終つたのであつた、憐れなる農夫は深く彼れの行爲を憤慨し、大膽にも王に面謁して一伍始終の物語りをした、之を聞きて王は自己の信任せる兵士は斯の如き淺はかなる卑しい行ひをする奴であつたかと云ふ事を今始めて知り大に怒つて至急此兵士を召還し、罰として兵士の前額に「恩知らずの客」と謂ふ語を焼きつけたのだ、斯くして身親ら富まむとして他人の地を奪ふ如き卑しい行ひをした人だと謂ふ事を廣く世間に知らしめ、彼は死に至るまで衆人より排斥せられたと云ふ事である、

you shall have your wish 今汝の望を協へん。

from beguimg to end 一伍一什。

sent for 呼びにやる。

第三十四章

アレキサンダーとバセファラス

或時フキリップ王はバセファラスと云ふ名馬を買つた、此馬は中々良い馬で随分高い金で買つたのだが、未だ人馴れしない山出しの儘であるから乗る事は勿論、外の仕事にも使へないのだ、人々は之を馴さんがために或は鞭打つ様な事をしたが、益々馬を悪くするばかりで、遂に王は彼の臣下に命じて馬を放逐せしめた、所が王の令息アレキサンダーは『斯の如き良馬を其儘朽ち果てしめるは惜しい事だ、彼等は如何にして馬を馭するかを知らないのである』と謂ふと、王は半ば冷笑を交へ『多分汝は彼等より馬を取扱ふのは上手だらふな』と答へた、アレキサンダー更に『若し父上が私にかの馬を任せてさへ下されば私は誰れよりも上手に馬を取扱つて見ませふ』と云ひ

It is a pity.....は駿馬を打ち果てしめるのは可愛相だ。

『然らば若し出来なかつた時にはどーするか』との問に對し『馬の代價を自分で拂ひませふ』と斷言した、で、アレキサンダーは直ぐ馬の所に行き馬首を太陽の方向に向けしめた、之を見た人々は何をして居るのだと謂はぬばか嘲つて居た、アレキサンダーは馬は馬自身の影を恐れて居るのだと謂ふ事を知つて居たから、温和しく馬に語り或は馬を軽く打ち、馬の少しく静まるを俟ち、急に身をおごらせて馬上に飛び上つた、側に居る人々はレアキサンダーは屹度馬に殺されるだらふと豫期して居つた、所が彼は馬上に坐して全速力で以て走らしめ、馬の疲勞したるを見て、再び王の立てる所に返して來た、

すると其邊に居た總ての人は之を見てアレキサンダーは馬術の師であると絶叫したのであつた
アレキサンダーの再び地上に下るや、王たる父は直ちに側に來りて暖

Killed outright は確に殺される by and by 段々ぞ
will be worthy of you 汝に相當せる more than one 一度ならず。

き接吻をし、『マセドンは汝の領地としては小に過ぎて居る、汝は汝の身に相當せる大王國を求めなければならぬ』と曰つた
 其後パセファラスはアレキサンダーによく馴れ、アレキサンダーも亦深く馬を愛した、だから此人と馬とは常に一緒に居ると謂はれた位で、又アレキサンダーがパセファラスの何れか一つが目に付けば其側には屹度他の一つも居つたのだ、此馬は主人以外の者は何人たりとも乗せないものであつた、

後年アレキサンダーは有名なる王、勝者として世に知られ、ためにアレキサンダー、ゼ、グレートと呼ばれるに至つた、
 パセファラスは大王と共に常に各地を跋渉し、幾多の激戦に参加し、大王の身危き時之を救ひしは一再にして止まらなかつた事である、

第三十五章

賢人デオゼンス

昔希臘のコリンスと謂ふ所にデオゼンスと謂ふ賢人があつた、澤山の人が此處からも彼處からも集りて彼に遭ひ而して其話を聞かふしたのである、

所が此賢人デオゼンスは色々の不思議な癖を持つて居た人で、總て人間と謂ふものは自分の必要なものさへあれば夫れで充分だと信じ、敢て澤山の物は要さないのだと謂つて居つた

夫で彼は居常家の中に住んで居らないで槽の様なものの中に眠り、之を持ち運んでは今日は此處、明日は彼處と謂ふ風な生活をして居り、常に日光に晒されつつ、己が此周圍に群れる衆人に教を垂れて居つたのだ、

all parts of the land 全国より more things than he really needed (必要以外の品物。

或日の正午の事だがデオゼンスは手に火を點せる提燈を持ち大通りをブラブラ歩いて居つて恰も何か落したものを探して居る様に其處彼處を眺めて居つたのだ、すると一人の人がありて

「何故汝は白晝提燈を持つて御出でですか」と尋ねると「私は或正直な人を探して居るのだ」と答へた、で、アレキサンダー大王がコリンスに行つた際市の有力者は揃つて彼を迎へ彼を賞讃せんと出て來たがデオゼンスはやつて來ない、而もアレキサンダー大王の當地に來れる目的は一にデゼンオスに面晤せんためであつたのである、所が肝緊の賢人が出で來ないから大王親ら賢人に遣はんとして其居所を尋ねると桶を側にして横はりながら異様な場所でデオゼンスに遭つたのだ、實に彼は其時日向に暖を取つて居つたのである、

デオゼンスは大王と外に澤山の人民が此方に來るを見て、彼は座して大王をデット見つめて居た、する大王は會釋をし彼れに語るらく、

he was the only man……は大王が遣つて見やうと思つて居たのは此人ばかりであつた。

「デオゼンスよ、余は御身の才智につきて色々の事を豫々聞いて居つた、余は今何か御身のためにする事はないだらふか」、デオゼンスに答へて「余を影にしないで暫く余の側に立つてて賞ひたい」と謂つた、此答は又非常に意外であつたものだから王は甚だ驚きた、が大王は此不敬の言に少しも怒らず、益彼を以て一大異人と信じたのである、而して大王は馬首を返して歸途についた時に彼の部下を顧て曰く

「汝達は自己の欲する所を謂べ、我若しアレキサンダーにあらざれでデオゼンスの如き人にならむのみと」

第三十六章

勇敢なる三百人

希臘全國は危機に迫り波斯王の率ゆる大軍は西方から段々進軍して來たのだ、當時此大軍は海岸地方を進軍しつつあつたので、三四日の

but-of the way 奇怪なる

So as not to keep the sun shine from me は日光を遮ぎらない様にして

admire the strange man all the more 尙一層異人を賞賛する様になる。

If I were not Alexander……は余はアレキサンダーになり能はずんば。

内には希臘に達するだらふとして居つた其時に波斯王は檄を各州及都市に飛ばし土地及海は大王の有なるを誓はしめ、水と土地を献すべしと命じたのであつた、然るに各州及都市は「斯の如きは吾人の勝手である」と謂つて一言の下に此命令を弾ね付けた、

此に於て希臘は大騒動で男子は何れも武器を擁して出陣に忙しく、或は敵兵を驅逐し、又女子は泣く泣く家に止りて男子の歸宅を待ち、恐怖を以て震つて居つたのである

併し波斯の大軍が海岸より希臘に侵入するには是非共山と海との間なる狹隘なる道を通らねばならない、而して此道は三百のスパルタの勇士を率いて居るスパルタ王レヲニダスが守つて居るのだ、

間もなく波斯の大軍は此處を目掛けて目睫の距離までやつて來た、其大衆なる殆ど幾何なるを知らず、而も如何にしてスパルタ三百の勇士は此雲霞の如き大軍に抗せんとするのであるか、

レヲニダス及其部下は此堅を固守して少しも離れない、實に彼等三百人は共に此地に死なん事を誓つて居たのであつた、或者は波斯軍の大勢なる事其失を以て日光を遮ぎる事が出来るを謂つたのである

之を聞きスパルタ人は「大勢なれば大勢なる程宜い、我等は死すまで戦はん」と謂つた

大膽にも此等三百の兵士は狭き道を遮つて立ち、雲霞と群れる大軍に面したのだ、スパルタ人は恐怖の念なるものは抱いて居らないから、前進し來れる波斯軍は勇敢なるスパルタ人の鋒先きに觸れ唯死あるのみであるのだ、

然れども寡以て衆に敵すべからずスパルタ人は一人一人と減つて行き、遂に彼等の武器たる鎗も折られ、而も生あるものは相並むで立ち十人が一人となる迄花々しく戦つたので其中には劍を抜いて戦ふものや、武器のないものは自分の拳や齒で以つて敵に抗して居つたのだ。

made up their minds=determined their minds にして意を決して。
Some one brought them word 流言を放つものあり。
So much the better 多ければ多い程結構だ。
we shall fight in the shade 死すまでは戦はん。
persians came forward, only to meet death 波斯人に殺して貰ひに來る様なものだ。

Say what you will 汝等思ふ通を謂へ。
we will be free 我々の勝手なり。
there was only one way………は入込む道は唯一つなり
No man could count them 數へられない位の多數。
a handful of men 僅かなる人數にて to stand against は守る。

波斯の大軍は終日スバルタ人の防禦により進軍する事が出来なかつた併し太陽が西に落ちた時には既にスバルタ人には一人の生存者さへなく、彼等の立ち居た場所には槍や矢が毛の様に様澤山突き立つて居る死體が山をなして居つたのである。

此際波斯軍は僅かに三百のスバルタ人を破らむとして二万の士卒を失ひ、斯くして希臘全國は幸ひに焦土となるのを免れたのである、爾來數千年を過ぎ去れる今日でも尙邦家のために死せる彼等三百の勇士はレランダスの名と共に人口に膾炙して居るのである。

第三十七章

ソクラテスと其家

昔希臘にソクラテスと謂ふ一大賢人があつた、彼の教へを受けんとし其邊から集り来るもの門前市をなすと謂ふ如き有様であつたから彼

は色々の面白い事を聞かして彼等を樂しましめ、彼の話を聞くのが厭だと言ふ様な飽きが来る人はなかつたのである。

或夏の事であるが彼は家を造つた、併し其家は又非常に狭いもので近隣の人はあの中に住めるだらふかと謂つて怪しむ位であつた、で人が問ふて。

汝は實に立派な偉人であるのに何故又箱の様なあんな小さな家を建てたのですか」と謂ふと答へて曰く「如何にも仰有る通り或は何か意味があるかも知れない、併し斯る小さい家でも私は實際の親友で以て之を充す事が出来れば之程愉快な事がないと思つて居るので」と、

第三十八章

王とその鷹

ジンギスカンと謂ふのは一國の王で又勇敢な人であつた、

there may be little reason 譯があるかも知れない
Small as the place is=though the place is small 家小なりと雖も。
even it. 斯様小さい家でも親友で充たすのは六ヶ敷いのた意を偶するなり

one by one 一人減り二人減り。
fightny to the last 最後まで戦ふ。
was kept at bay 防がれた。
Since then 爾來
their counreg sake 邦家のために。
No one ever grew tired of..... 厭にならない。

彼は兵を率いて支那や波斯其外澤山の國を平定した人である、世間ではジンギスカンの勇敢なるを稱しアレキサンダー以後如斯き大王なしとさへ云つて居るのである。

戦争から久振りに家へ歸りて或朝彼は遊獵に森の方へ馬を進めて行つた、其時には彼は澤山の友達を連れて居つたので何れも華美に弓矢を携へて馬を走らせて行つた、其跡から召使共は犬を連れて付いて行くのである此獵は甚だ面白いものであり叫喚、笑聲森ために振ひ屹度澤山の獲物を土産に出来るだらふと思つて居つた。

此當時は鷹が主として獵に用ひられて居たものだから、此王の腕にに常々愛して居る鷹が坐つて居る、主人の一聲が掛ると鷹は空中高く飛び上りて獲物を探し、鹿や兎の様なものを見付けると恰も弓を離れた矢の如く其上に舞下るのである

ジンギスカン始め此一行は終日森を涉獵したが、思つた程の獲物がな

い、仕方なしに夕方になつて歸途に付いたのである、所で此王は度々森の中を涉獵した事があるから何處に道があるか謂ふ如な事はよく知つて居る人だ、即ち一行中のものが近道をして居る時に王は態々遠廻りをし山と山との間の谷を通つて居つたのである。

其日は又非常に暑い日であつたから王は段々渴を覺て來た、彼の大事にして居る鷹は王の手を離れて王宮に歸る道を探しに行つたものか飛び去つたのである。

而して王は馬上靜かに馬を打たせつつ、曾て見覺えのある清泉を尋ねて居たのだ、見付ける事が出来たら何んなに嬉しからう！悲哉早魃と暑さで以て溪川の水は全く涸れ果ててあつたのである、然るに幸にも王は、とある岩根に流れ出して居る水を見出し屹度此近處には泉があるだらふと知つたのである、雨期などには常に水流は此處を流れて居るのであるが、今では僅に一度に一滴二滴の水が滲み出で來るに止ま

At a word from their masters 主人から聲が掛れば。

Rest of the party 一行中の外の人達。

It would be sure to find.....は道を探しに行きしものなり。

dried up は涸らし盡くす。

farther up 此處を去る。

it came only one drop at a time 一滴づゝ落ちるに止る。

るのだ。

兎に角王は馬より飛び下りて獵用の鞆から銀製のコップを取出し、此一滴づつ落ちて居る所に受けて居つたのだ。

此コップに水を満すには長い時間掛るのだが、王は今や渴して之を待つ事が出来ないのであつた、がやつと水も一杯になつたから、之を飲まんとコップを唇頭に當てる同時に空中にさつと聲があつて何者とも知れずコップを打ち落とし水をすつかり流して終つたのだ。

で王は何者の仕業ならんと之を見れば之れ彼の大切にせる鷹の仕業であつた。

鷹は二三度其邊を飛び舞つて泉の側なる岩根に止つたのである。

王は再びコップを取り上げ、滲み出る水を再び之に集めんとし、今度は以前程も長く待つ事が出来ないから、半分位水が集つた時に再び飲まんと之を口に當てんとしたが此時遅し鷹は再び舞ひ下りて、コップ

to catch the slowly falling drops 緩やかに落つる點滴を受ける。
It took a long time 長い間掛る。
he could hardly, hardly 殆ど not と同じ意に用ひらる。
about to drink, 飲まんとす。
All at once 此時遅し彼時早し、一刹那。

を其手より取落したのだ、此に於て王は漸く怒つたが尙渴に堪えず更に水を集めて飲まんとすれば鷹はごりしても之を飲まさない。

事此に至りて王は非常に憤怒し、遂に怒鳴りつけて曰く「何を以て汝は斯の如き悪戯をなすや、若し汝は余の手中にあらば余は汝を絞め殺さん」と

斯く謂ひて彼は又水を杯に満し、先づ之を飲む前に劍を抜き更に鷹に謂つて曰く「今度は最後であるぞ」と

王は此語を發するや發せない内に鷹は再び舞ひ下り來りてコップを打ち落した、併し王は之を待受けて居たのであつた今度は鷹が自分の前を通過した時に電光石火の働にて鷹に切りつけたのだ、次の瞬間に可憐なる鷹は王の足下に血塗れとなり倒れて居つた、此時ジンギスカ

ンは

「斯のなり果てたるは汝の罰である」と云ひつゝ、自分のコップを探

how do you dare to act so 何を以て斯くの如き悪戯をなすや。
if I had you in my hand 手中にあれば。
this is the last time 今度はしまいであるぞ。
he had hardly spoken 話すか話さない中に。

すと、不思議や王の手が届かない岩と岩との間に落ちて居るのだ。
王は

「兎に角余は此泉の水を飲まねばならない」と獨語しつつ、一生懸命に水の滲み出る所に至らんと絶壁を攀ち上り出したのだ、併し夫は中々骨の折れる仕事で、高きに上るに従ひ、渴を感じる事益甚しい、がどーやらして水が出る所へ来る事が出来たのだ、其處には水溜りがあった、あな嬉しやと思ふ間もなくよく水の中を見ると何か其中一杯になつてあるものがある、此物は實に有毒なる大蛇の屍體であつたのである。

王は全く躊躇した、渴すらも全く忘れ唯々自分が手に掛けて殺した鷹の事はかりを考へて居つた、が遂に

「鷹は我が再生の恩人である、而も余は如何に鷹に報ひたらふか、鷹は余の最愛なる友達である而も余は自ら手を下して彼を殺したのであ

that is what you get for your pains 悪戯をした罰だ。
at any rate けえに角。
It was hard work 骨が折れる。
how did I repay him 何を以て彼れに報ひせしや。

と彼は再び絶壁を俯ひ下り鷹の屍體を取り上げて鞆の中に納め、馬に跨つて出来る丈け速く王宮に歸つて來た、彼は

「余は今日悲むべき事を經驗した以來は決して憤怒に任して何事もなさざるべし」と獨語したと謂ふ事である。

第三十九章

醫師ゴールドスミス

ある所にフリバーゴールドスミスと謂ふ親切な人があつた、彼は澤山の人を喜ばす本を書き、其本は後來諸君も屹度讀まれる事があるたらふと思ふ。

彼は親切な人で、何時でも他人を助けたり、これに自分の持つて居る物を分けてやる様にして居つた、そして余り澤山やつてしまつたから自分では何時も貧乏をして居つた

never to do anything in anger 憤怒に乗じて何事もせず。
he gave away so much.....always poor himself 人に物をやり過ぎて常に自分貧乏をする。

彼は時としては御醫者のゴルトスマスさんと呼ばれて居た之は彼が醫者にならふとして勉強したからである。

一日或貧乏な婦人が御醫者のゴルトスマスに「ごー」か来て病氣で何も食べる事の出来ない我夫を診て呉れる様にと頼むのだ。

ゴ氏は承知して、行つて見ると其一家は大窮困の有様で、男は長い間仕事が出来ず、其男は病氣じやない、不幸なので喰物とは何一つ家にないのである。

「今晚私の室に御出で、何か薬を上げるから」ゴ氏は婦人に云つた。其晩婦人が訪問して見るとゴ氏は非常に重い小さい紙箱を呉れた。

ゴ「これが薬です、丁寧に用ひるがよい必ず全快するから……然し家へ歸るまで開けちやいけないよ」

婦「ごーして飲むのでせう」

ゴ「箱の内側に書いてある」

family was in great need 家族を救助するは憊眉の急なり。
what are the directions……は如何に用ゆれば宜しいか。
you will find them……は箱の内側に用法は書いてある。

斯くして婦人が家に達した時に夫の側に坐つて兩人で箱を開いた其中に何があつたらふか、中には貨幣が一杯で上の方には次の用方箋があつた。

「必要の時に用ひよ」

實にゴ氏は自分の持つて居る金を残らず遣つたのであつた。

第四十章

王國

昔プロシヤにフレデリックと云ふ王があつた

六日の或好い朝彼は唯一人緑滴る森の中を散歩した、都會の騒々しい音に疲れた彼は其都から遁れ出るのを喜んだのである、そー云ふ譯で樹々の間を散歩する時には或は囀る鳥に耳を傾けたり、或は何れを見ても生ひ茂れる野花を見んために立ち止まつた、時としてはスマレ、

to be taken……necessity requires は必要に應じて用ひよ。

櫻草或は毛茛などを摘み、見る見る内に彼の両手には美しい花が一抔になつて居つた暫くして彼は森の中の小さい牧場に来ると其處には數人の子供は遊ぶで居る、子供達は此處彼處に馳け廻りながら草の中に咲き亂れて居る花を摘むで居るのであつた。

此子供達の嬉々として樂み、美しい聲を聞くのは王をして其心を甚だ喜ばしめ、去るに忍びないのであるから佇立する事少時専心子供の遊びを見て居つた。

其時に王は子供達を自分の側に呼び寄せて涼しき木蔭に坐つたが、子供達には此紳士は誰れであるかと謂ふ事を知らない、併し紳士の温顔及び其温和しき態度は全く子供から好かれる所となつたのである、そこで王の曰く。

「皆さん方よ、私は今二三の問題を出しますから、夫に最も好い答をした人には御褒美を上げませう」

先づ彼は子供達によく見わる様に橙を差し上げた

王「皆さんも知つてる様に私達は皆プロシヤ王國の中の住むで居る、併し此橙は抑何界に屬するものでせう」

小供達は其答に迷つた、互に顔を見合せて暫く黙つて居つたが元氣の宜い賢そいな子供が臆する所もなく、

「植物界に屬します」と述べた

王「何故か」

小「それは植物の果實です、そして植物は皆植物界に屬します」

之を聞き王は喜びて謂ふには

「その通り、では御褒美に此橙を上げやう」甚だ満足げに王様は橙を小供の方に投げられて「捕れば御捕り」

今度はポケットから金貨を取出し之を朝日に照して

王「それでは之は何の界に屬しますか」

then he held up 彼は手に上げて。
looked at one another 互に目を見合はす。
for a little while 暫らく。

now and then 時折。

外の賢そーな子供は直ぐに

「鑛物界に屬します、金屬は凡て鑛物界に屬します」と答へた

王「よろしい、此金貨は汝に上げやう」

子供達は喜んだ、熱心な顔付きして此次には此知らぬ人がごんな事を聞くだらふかと待ち構へて居る。

王「もー一つだけ聞きませう、極く容易な問題ですよ」

斯く謂ひつゝ立ち上つた王様は

王「皆さん私は何王國に屬しますか」

伶俐な子供達も此問ひには弱つて或者はフロシヤ王國と謂はふかと思つたり又或者は動物界と答へやうと思つた、併し何れも皆多少共憚る所があつて黙つて居た。

其時に小さい美しい目付の子供は王に笑顔を眺め乍ら簡單に。

「私は天界に屬すと思ひます」

I will ask you only one more question もう一つ聞かう。
they were a little afraid 少しく憚る點ありて。
all kept still 靜にして居る。

此に於てフレデリック、ウキリアム王は身を屈し此可憐なる少女を抱き、暖き接吻をされた時には王の兩眼には涙の輝けるものがあつた、そーして謂はれるには。

「兒よ、然らん、然らん。」

第四十一章

バーメサイドの餐廳

曾てハーメサイドと謂ふ金持の老人があつた、彼は花咲き亂れたる園の中に立派なる殿堂を立てて之に住し、自分の欲^ほしいものは何でも整へる事が出来た、

又同じ國にスシヤカバクと呼ぶ貧乏な人があつて着物は常に襤褸を纏ひ、其食ふ所は他人が捨てて顧みない残飯であつたのだ、が彼の心たる赤貧に甘んじて居り、自分では王の様に幸福なものだと思つて居た

So be it そーだそーだ
he had everything could wish 欲しいものは何でもある。

のである。

或日の事スシヤカバックは何も食ふものどてないから、彼れはパーメサイドの所に行つて何か食はして貰はふと思つたのだ。

此富者の門に訪れると召使の者が出て来て之を取り次いで曰く「御上りなさい、そゝして主人と御話しなさい、何か屹度御馳走が出ましよう」と。

スシヤカバックは内へ通つて幾多の美しい室を経て、遂に床には柔き毛を敷き、壁には名畫を掛け、華美を盡した腰掛け等裝飾至らざるなき大きい坐敷へ來たのである。

で此室の上坐には白き長鬚を生やした貴とげな人が居る、夫れはパーメサイド其人で、室に入ると共にスシヤカバックは叩頭して禮をしたのだ尤も之は此國の慣習なのだ。

パーメサイドは非常に親切げに話をし、何の用があるのかと尋ねた、

此に於てスシヤバックは自分の今の困難につき話し今日でパンを食はない事二日に達する旨を告げたのだ、

そゝするとパーメサイドの曰く

「そんな事は出来るのかな！、然らば君は空腹を以て將に死ぬたらふ、而も私の宅には食ふものが澤山あるよ」と

斯く謂ひつつ彼は旁を顧みて曰く「給仕よ我々の手を洗ふ水を持ち來れ、そゝして至急料理人へ晩飯の用意をする様に……」

スシヤカバック斯くも親切に待遇せられるとは豫期しなかつた所で、深く富者の親切を謝した。

するとパーメサイドか

「一語も感謝なんか謂はなくてもよろしい兎に角食事に掛る用意をしよう」と謂ひつつ富者は恰も水の中で手を洗つて居る様に手を擦つて居る、で更に「君も早く來て手を洗ひませんか」と促して居る。

Is it possible そんな事は出来るか。

dead with hunger 餓死する。

Say not a word そんな事を仰せらるな。

he ought to do—he wanted to do にしてなさればならない。

he will not send you away hungry 空腹の儘飯さぬだろ—即御馳走するならん。

スシヤカバックは給仕は勿論、手洗ひ桶、及び水さへも見ねない、が之れは彼が云ふ様にしなければならぬと考へ、パーメサイドがして居る様に矢張り手を洗ふ真似をして居る。

パーメサイドは更に「然らば此方へ御出でなさい、晩食をやりましよふ」と謂ひつつ彼は恰も食卓につくが如くに座り焼肉を切つて居る様な手付をして居る、で謂ふには

「遠慮せずと召上れ、汝は空腹だと謂つて居るから、ごーか澤山召上つて下さい」

スシヤカバックは之を以て全く戯れにして居るのだと考へ、自分も亦食物を取りて口の所へ持つてて行く真似をして居つた、すると今度は口の中で肉を噛む様な事をしそして曰く

「御覽の通り僕はこー云ふ事には躊躇しませんよ」と

此に於て富者は給仕を呼びて鷺鳥の焼肉を命じて曰く

「君よ、此は鷺鳥の胸の肉だ、夫で此處にソースや蜂蜜や干葡萄や、青豌豆、干無花果などがあるから、ごつさり食つて呉れ玉へ、そして尙外に色々御馳走もありますから……」

此時に當りスシヤカバックは殆ど空腹を以て昏迷せんとしたが、元來彼は命せられた事やらない様な不禮な男じやないからやつぱり主人の云ふ通りして居る。

「さー、此に仔羊の焼肉が出来ました、汝は以前にこんな美味なものも食つた事がありますか」

「いや始めてです、實に結構な食事の御馳走になりました……」

「ごーか腹、一杯食つて下さい、主人として之程嬉しい事はありません」

夫から間もなく食後の果物が運ばれた、これはパーメサイドが糖果と果物を云ひ付けたのであつてスシヤカバックをして此等を食つて居ると

was too polite not to do.....[丁寧な男だから云ふ通りにして居る。
Never in my life 今までは未だです
your table is full of good things 美味しいものばかりです。
you cannot please me better これ程主人として嬉しい事はない。

help yourself 腹一杯召し上れ。
I lose no time グズグズしない。
remember that..... まだ外にありますよ。

信せしめたのだ
主人客に向つて

「何か御望みのものがありませんか」と問ふと憐れなるスシヤカバ
クは

「あゝも一澤山です」と答へた

「では酒を飲みましょふ、給仕、葡萄酒を持つて来い」

「主人よ、私は酒は禁しられて居りますから酒は頂戴しません」

事此に至りパーメサイドは彼の袂を捉へさて

「私は長く君の様な人を探ね求めて居つたのである、さゝから美味
く食事を共にしましょふ」と謂ひつつ彼の手を打てば、聲に應じて召
使は来た、そこで晩食を命じ、今度は前の様な真似事ではなく珍味の
皿が食卓の上へと運ばれ、此に兩人は腰を下したのだ

貧困なるスシヤカバは一生涯を通じて斯の如き美味に飽いた事がな

Now is there anything else.....you would like 何か御好みはありませんか。
of which they had pretended to eat 前には食ふ真似をした。
your wits are quick 頓智が利く。

いのであつた、食事が済み、膳が下げられた時にパーメサイドの曰く
「私は君を以てよく物事の分つた方だと思ふ、君は才智に長け、如何
なる事にも其最良なるものを竭さんとして居られるのである、ご一
か僕と一諸に住み、以て僕の家一切の事を支配して下さい」
此に於てシヤカバは多年パーメサイドと共棲し再び空腹を知らず
に暮らしたのである

第四十二章

終りなき話

東洋に會て唯遊ぶで居るより外に何もする事のない一人の大王があ
つた

此王は毎日朝から晩まで柔き褥に坐して色々の話を聞いては暮ら
して居るので、又どんな長い話を聞いて居ても決して飽いて來ると謂

what it was to be hungry 空腹さばごんなものか.....。
No matter what the story was about 話ばごんな事である-ごも。
only one fault.....with your story 汝の話の中でいけない所は。

ふ様な事がなかつたのだ
夫れで王はよく

『余は汝の話の中で一つの過ちを見出した、夫れは外でもないが、汝の話は余り短い事だ』

そこで世界で話し家と謂はれる人々は皆此王宮に招待され、時には非常に長い話をした人もあるが其話が終ると王は常に情けないと云ふ風な顔つきをして居る、此に於て王は各都市より片田舎に至るまで布令を出して終りなき話をする人には賞を與へんと即ち王は

『永久終る事なき話をなす人には其妻として余が娘を與ふべし、而して彼を以て余の相續者となし、余に代りて王位に即かしめん』

と、此外尙ほ彼は附言して『終なき話を語らんと申出でたるものにして若し失敗に歸した時には其罰として其首を刎ねん』と誠に難澁な條件をつけたのである

a warning to others 他の人等の戒めとなり。

he sent word 布告を出す。

very hard condition むづかしい條件。

此王の娘は中々の美人で、此美人を得んためには如何なる事をもなすべしと謂ふ如き若き人が澤山あつたのだ、併し誰れにしても自分の首が切られるのは厭だから、此王の布令に従ひやつて見やうと謂ふ人が甚だ僅かであつたのだ

或青年は三ヶ月程も續いた話をしたが、其後は謂ふ事とてなく話の種が全く竭きた、而して前の約束により彼は處刑されたが之が前例となつて誰も王の布告の通りやつて見やうと謂ふものがなかつたが、程經て一人の無鐵砲な話家が出て來たのである

即ち或日の事南方から一人の外國人が王宮にやつて來り王に云つて曰

外『大王よ、終なき談をする人には賞を與へると謂ふのは事實ですか』

王『夫は事實だ』

to do anything to win her 王の娘を保んためには水火は中も辭世ない位の。
he could think of.....は話の種がつかさる。

外『而して其話をした人は王の令嬢を娶り、後継者となる事が出来るのですか』

王『然り、若し成功すれば……併し失敗すると首はなくなるのだ』

外『よろしい、私の御話しよふと思ふのは蝗蚱に付ての話で中々面白いのです』

王『じゃ其を語せ、余は聞くであらふ』

此に外來の人は其話を始めた曰く

昔し〜或王が全國の穀物を取集めて之を堅固なる倉庫の中に納めて置いた、所が蝗蚱の一群が何處からとなくやつて来て、穀物を貯へて居る倉を見出し、數日間掛つて其倉の東側に一匹の蝗蚱が入れる丈の隙間を見付出したのである、で先づ一匹の蝗蚱が中に入つて少しの穀物を取り出し、次に他の一匹が中に入つては少しものを盗み出して来る、斯く謂ひつつ時日は経過して行く而も話家は尙語を續けて『他の蝗蚱

once upon a time 昔し昔し。

seized upon は gathered の意にして集める。

just large enough for……は一匹蝗蚱が入れる位の大きさ。

carried away 運び出す。

day after day, week after week 日を重ね週を隔し。

が中に入つて少量の穀物を取り出す、遂に話を初めてから一月たつた、斯くして一年を経過した而して二年間の終りに於て王は「何時まで蝗蚱の倉の中へ入つて穀物を取つて来るのか」と問ふと「大王よ、蝗蚱は今まで漸く一キュビット丈しか穀物を取去らない而も倉の中には幾千萬キュビットの穀物があるのです」と

此に於て王は叫んで曰く

『話家よ、汝は余を氣狂にするであらふ、最早や余は此話を聞くに堪へない、約束の通り余の娘を遣はす、余の相續者と汝を定める余の王國を支配せよ、然れども今後決して余に此恐るべき蝗蚱につき一言も語る勿れ』

斯くして此外國人は王の娘を娶り、末長く楽しく其地で暮らしたそで、夫からと謂ふものは前王は決して如何なる話にも耳を假さなかつ

get cleared only one cubit —キュビットを運び出したに止る。

you will drive me mad 汝は余を氣狂ひにすべし。

no longer は no more にして最早……せぬ。

did not care to listen to any more stories ごんな話も聞かんとはせず。

たそ—である、

第四十三章

盲人と象

曾て六人の盲人があつて共に毎日路傍に佇み道行く人に袖乞ひをし
て居つた、

此盲目の人達は屢々象の事を聞いては居たが未だ之を見た事がない、
盲人は如何にして物を見る事が出来様か

所が或朝の事一匹の象が盲人共の立つて居る道を歩いて来た、人々は
盲人共に今日の前に大きい象が来ると知らしてやつたから、盲人共は
象を追へる人に暫らく止つて自分共に一目見せて呉れと頼むた
勿論彼等は目で以て見る事が出来ないから手で觸れて見てごんな動物
だらふと謂ふ位の事が分るだらふと考へたのである

driven down the road 象を追ふて道をやつて来る。
So that they wight see him, that wight (は爲めに……)なり故に彼れを見んた
めに……。
of course (は勿論)。

で第一番に一人の盲人が其手を象の横腹に置き叫んで曰く「分つた、
分つた、自分は太抵此獸の事は分つた、丸で壁の様だ」

第二の盲人は只だ象の牙に觸れた、而して曰く「今謂つたのは間違つ
てるぞ、象は壁の様じゃない、彼は丸くして滑に且つ尖つて居るから
何より槍によく似て居る」と

第三の者象の鼻を捉へ曰く「君達は共に誤つて居る、此象は丁度蛇の
様である事は誰でも知てて居る」

第四の者は其手を延して象の足を捉へ曰く「汝達はほん^チとに盲目だ
象は圓くして木の様なものだと言ふ事は明らかな事じゃないか」

第五の盲人は人並外れた脊の高い人であつたから象の耳の捉へた、
曰く「此象と謂ふものは汝達の謂つてる様なものは全く違ふで、象
は大きい扇の様なものだ」

第六の人は盲人の中の盲人とも云ふべき人で、象を見附けるまで中々

they could learn just (はごんな獸である)知る事が出来る。
happened to put his hand (は不圖手が觸つた)。
at all (は全く)。
more like (より似てる)。
to take hold of (掴へる)。

眼が取れた、が遂に彼の象の尾を握り當て「汝達は馬鹿な奴等だ、屹度知覺を失つたのだらふ、此象は壁や槍や蛇や又木、扇の様なものじゃない、少くとも知覺の少しでもあるものは象は繩の様なものであると謂ふ事を知るのである」

此時象は動き出した而して六人の盲人は又終日路傍に坐し象に付て口論して居る、で各人は象其物を見た様に思つて居るのであるから各人の己れに一致しないのを見て互に悪口を吐き喧嘩をして居る始末だ、併し目を持て居る人でも時々馬鹿な事をやるから盲人の口論位は……

第四十四章

マキシミアンと鷺鳥番人

或夏の日ババリア王マキシミアンは田舎を散歩して居たが、余り日の照り方が暑いので、とある木の下で休むで居た、

夏の日に涼しい木の影で休むで居るのは又格別なもので、王は柔き

草の上に身を横へ、空に去來せる白雲を眺めて居たが、今度はポケットから小さき本を取出し、之を読み始めた、併し王は充分本を注意して讀む事が出來ず、彼の目を閉ぢ、知らずく眠つて終つたのだ、目の醒めたのは晝過ぎで、其草の褥より起き上りあたりを見廻して杖を取り家路をさして皈つて來た

王が一哩以上も歩いたかと思つた時に、不圖自分の本の事を考へ出したからポケットの中に手を入れて探して見ると其中に入つて居ない實に彼は木の下に夫を忘れて來たのである

此時王は既に甚だ疲勞をして居たから再び一哩以上も歩き戻るのが厭だ、と謂つて本を失ふのも本意にあらざれば如何にせんかと躊躇して居た

若し此處に本を取りにやる誰れか居ればなと王は思つた

Got up 起き上る。

a mile for more 一哩以上

to send for it 本を取りにやる

with a particle of sense 少しの感覺さへあれ。

moved on (or) went on にして進み出す。

people who……as foolishly 目がある人でも馬鹿な事をやる。

to rest 休まんとして。

keep his mind (or) his mind 本に精神を集中するに。

斯く王が考へて居た時に程近き野で働いて居る裸足の子供を見た、此子供は小さい草を喰ひ、浅い小川で遊べる鶯鳥の大群を見守つて居るのであつた

此に於て王は子供の方に歩み寄り、片手に金貨を握りつつ

王『子供よ、汝は此金貨を欲しくはないか』

子『私は夫を欲しい、併して澤山は要らない』

王『此道の第二の曲り角に櫛の木がある、其下へ余は本を取残して來

た若し其本を取つて來て呉れば余は此金貨を汝に與へん』

斯く謂ひつつ王は子供は屹度喜ぶだらふと思つたのだが、事實は然らずで子供は彼方を向き

子『私は貴君が御考へなさる様な馬鹿な者じやありません』

王『汝は何を謂ふのか、誰が汝を馬鹿だと謂つた』

子『汝は私を一哩も走り本を持つて來れば金貨を貰へるものだと信ず

る様な馬鹿者と御考へになつて居る、その手には乗りませぬよ』

王『併し汝が此金貨さへ貰へばいいのだらう、余を信せよ』

と謂ひつつ彼れの小さき手に金貨を渡したのである、すると子供は目

を丸くして居たが尙動かない

王『どしたのか、汝は行のは厭か』

子『私は行きます、併し鶯鳥を見捨てて行く譯には参りません、鶯鳥

は散りくバラくになつてしまひます、然らば私は主人から

小言を謂はれねばなりません

王『余は汝の居らない間だけ鳥の番をして居らふ』

子供は笑つて

子『私は貴君の鳥を番するのを見たいものだ屹度暫くたつと鳥はバラ

くになりますから』

王『まーやつて見やう』

you cant catch me 私を欺す事が出来ない。

you shall have it—I will give it 汝に與へん。

遂に子供は王に鞭を渡して走り去つた所が子供が暫く走つて返つて來た

王『ごーしたのか』

子『鞭をビュー／＼と響かせなさい』

謂はれる儘に王はそーしたが、音がしない

子『私はそんな事だらふと思つた、貴君は何にもする事を知らないな』と謂ひつゝ、鞭を取つて其使ひ方を王に教へ鞭を返して曰く

子『分りましたらふ、鳥が走り去らふとすれば鞭を鳴らしなさい』王は笑つて居たが熱心に其教へを受け、子供は再び彼の使命を果さんとして出發した

で王は石の上に座し、鶯鳥の番人になつた哩、と思ふと微笑を禁じ得なんだ、併し鶯鳥は彼の主人の居らないのを知つて居たから王が如何に鞭を鳴らすも牧場を彼處此處と或は飛び或は走りつつバラ／＼に離

only let me try まゝやらして見よ。
I thought as much そんな事だらふと思つた。
how to do anything 何事も知らない。

散したのだ、そこで王は鶯を追ひかけた、が早く走る事が出來ず、鞭を鳴らしても更に效能が見ないので其間に鶯は遙か向ふに行つて仕舞つた、彼等は或は花園に入り込み、或は柔き野菜を食つて居る等實に狼藉を働いて居るのであつた、夫から間もなく番人の子供が返つて來た、其時に

子『矢張り私が考へて居つた通りだ、私は本を持つて來た、が貴君は鶯鳥を失つた』

王『心配するな、已は再び鶯鳥と一緒に集めてやらう』

子『じや貴君は其道を廻つて、私が花園から鶯鳥を追ひ出して來るまで小川の側に立つて居て下さい』

王は仕方がないから其通りした、子供は鞭を以て走り、散々聲を囁らし奴鳴り立てた後やつと鶯鳥を再び牧場の中に追ひ込む事が出來たのでたつた、で王は

just as I thought 思つた通りだ。
Run after 追ひかける。

王「余は鷺鳥の番人として其職責を竭す事の出来なかつたのは實に恥しい次第で、汝から許して賞はねばならない、併し余は此國の王だ、だからこんな仕事に馴れて居らないのである」

子「あゝ、ほんとに王様でしたか、王様に鷺鳥の番をさして何とも申譯ありません、併し、私も馬鹿じやない以上は貴君を王様だとは思ひませんよ」

微笑を湛えたる王は

も「よろしい、此に今一つ金貨がある而して今後我々二人は友達にならふ」

子供は金貨を受取つて王に渡し、其顔を見上げつゝ、

子「貴君は實に親切な方である、私は汝が善い王さんであるかも知れないと思ひます、が併し何か仕事をなさる方とすれば、汝は決して上手な鷺鳥の番人とはなれません」と云つた

第四十五章

インチケープ岩

北海にインチケープと呼ばれて居る一大岩礁がある、夫は何れの海岸をも去る十二哩に位置し、大抵の時は水で蔽はれて居るのである。澤山の船は此暗礁のために沈没した、と謂ふのは暗礁の頂きと水面との間隔が長くないから船が此上を通るとすぐ之に衝突するのである、今より百年程前の事だが、程遠からぬ所にアベルブロッツクのアボットと謂はれた親切な人が住むで居た、此人が幾多の勇敢なる水夫が此暗礁のために非命の死を遂ぐるを憐み、アボットは目標を作つて之を固く岩に結びつけた

で此目標は浅い水に浮いて居るが、丈夫な鐵の鎖で結び付けてあるから流れ去ると謂ふ事がない、又此目標の上に鈴をつけて浪が共に衝突

more than.....百年より以前の事。
most of the time 大抵の時は。
dashed against 衝突する。

かればチリン／＼と鳴る様な仕掛にして置いた、此のために航海者は此附近を航海するにもさして危険がなく、水夫達が鈴の鳴るのを聞くと暗礁の何れにあるかを知り、船は其鈴の周囲を通りて危地に陥るを免れたのだ、だから水夫等はアボットを徳とし、彼のために幸福を祈つて居つた

或海の静かな夏の日の事であつた、黒色の旗を翻した船が端なくも此暗礁の附近を通過したのだ、此船はラルフと云ふ海賊の所有するもので、海陸を問はず總ての人々から恐れられて居たのだ

此日は風無く海上鏡の如く、帆を柔ます風さへ少しもなかつたから船も殆ど動ない有様であつた

此時ラルフは甲板を散歩して鏡の如き海面を眺めて居ると不圖インチケープ岩の上に浮んで居る目標に気がついた、此目標は恰も水上にある一大黒點の如く見えたのだ

併し浪は至極穏やかであつたから鈴は別に鳴りもしない、其時ラルフは呼んで曰く「者共ボートを下して、インチケープ岩に漕いで行け、之からアボットの野郎に悪戯をしてやらふ」

そこでボートを下して屈強な水夫共は直ちにインチケープ目掛けて漕ぎ出し、間もなく船が着くとラルフは大きい手斧で浮標を結び付けてある鎖を切り、尙鈴をも離して水中に落下せしめた、此時ラルフは冷笑を浮べて「此次此處を通る船はアボットを有難く思はないだらふ」此時忽ち風が吹き出し、海賊船は帆を上げて出帆した、でラルフは獨り船上よりして以前の場所を眺めて居たが暗礁のある邊に目標らしいものゝないのを見て冷やかに笑つて居た

暫らくの間ラルフは海上の各所に出没して商船其他を荒し廻り、船の損害を負ふものが甚だ多かつた、で遂に彼は再び出發地に逆航せんとし其歸途に付いたが、風は其日非常に吹き荒れて、怒濤山の如く、船

the next one that come.....the abbot 次に来るものはアボットを難有からさるべし。
Black ship 海賊船。

God bless は祈禱の詞にして神にかけて祈る……。

no longer 最早……せぬ。

there was but little little は negative にして not の意を含む。

there was hardly, hardly も亦 not の意なり。

は矢の如き速力にて進行したのだ、併し暮方になると風は全く死し、濃霧が襲來した

此時に當りラルフは甲板上を歩いて居たが、霧のために四顧暗慘として船の針路すら分らなくなつたから嘆じて「霧さへ晴れ、ばな」と呟いて居た、

すると水先案内が叫んで曰く「浪の碎ける音が聞えるが之は屹度海岸に近づいたに違ひないでせう」とラルフは「確かに分らないが兎に角インチケープ岩に遠からぬ所と思ふこゝ云ふ時にアボットの鈴が有ればよいな」と云つて居る間に忽ち船が物に當つて碎ける様な音がした之を聞て水夫達は「インチケープ、ブロック」と連呼したが其時には最早船は一方へ傾き、段々沈み始めたのである。

ラルフは茲に至り「噫情けない事だ、之れと云ふのも彼の善人アボットにつまらない悪戯をしたからだ」と非常に悔ひ哀しんだが時既に遅く

浪は見る見る彼の身體を浚ひ去る、其刹那彼れは「海底深く沈み行く彼の身を吊ふ如く鈴が鳴らなかつたらふか

第四十六章

ウ井ッチントンと其猫

昔リチャード、ウキツチントンと謂ふ子供があつた併し人々は彼をチックと呼んで居た、一體此子供の父母は彼れがまだ赤ん坊であつた時に死んでしまつたので彼は他人の手に育てられて居た、が此人は極めて貧乏でチックもまだ小さくて働く事が出来ないから随分苦しい目にも遇つたのだ、で時には朝飯を食はない事や、晝飯を抜きにした事もあり従つてパンの片や一滴の牛乳でも貰つた時には非常に喜んだのである

チックの住むで居る町の人々は常に好んで倫敦の話をしたが彼等とて

babe は baby と同じ。

I can not tell—I am not sure にして斷言する事が出来ぬ。

I played on は慰みをした。

未だ都へ行つた事もないが併し倫敦に於ける色々の面白い事をよく知つて居たらしかつた、此等の人々は、倫敦に住んでる人々は皆立派な紳士又は貴女ばかりで終日歌を唄ひ音楽を奏し又誰も餓を感じると云ふ事もなく、と謂ふて別に働くのでもない、町は至る所黄金が敷かれてあると謂ふのであつた

ヂツクは此話を聞いてから、一度ロンドンに行つて見たいと思つた、が或日の事八頭立の大きい馬車が此町へ来て、兎ある旅館の入口に止れるを見た、之を見たヂツクは此馬車はロンドンに行くのに違ひないと思つたから、馭者が出て来て出立の用意に取掛つた時彼は側に馳け寄りつ、此馬車の側について行かして呉れを頼むだ、そこで馭者は怪しむで其理由を尋ねヂツクの憐むべき孤なる事を知り快く承知して呉れた、

併しロンドン迄歩くと謂ふ事はヂツクの様な子供には出来ない位長い

旅行であるが何うやら斯うやらしてロンドンまでやつて来た、そこで彼は人の話に聞いた驚くべきものを早く見んと欲し馭者に禮を謂ふ事も忘れて、其儘一生懸命に馳け出し、町を此處彼處と馳け廻つて黄金の落ちてゐる所を尋ねんとした

彼れは曾て金貨を見た事がある又夫さへあれば何でも買へると知つて居たから、今若し美しい石の一片でもあれば自分の思ふものは何でも手に入れる事が出来るだらふと思つて居た

斯く考へつつヂツクは所々を馳け巡り非常に疲れて最早や歩く事も出来なくなつた、其時には日は既に落ちて漸く暗く、町はと見ると思ふ黄金はなくして塵が一面に溜つて居るばかりであつた、で彼は茫然として道の傍に坐し終日の疲労のために眠つてしまつた、翌朝になつて目を醒ますと非常に腹が減つて居るが食物とて何もないのである、事此に至りては黄金どころの騒ぎではなく一意食物の事のみを氣を取ら

from one street to another は町の此處彼處。
woke up は got up と等しく目をさます。

If he might walk by the.....might は願望を示す意にして連れて行つて下されば.....
he might do as he liked の might は許可を與ふる意にして連れて行つてやる.....

れ何とかして食物を得んと町を歩き遂には堪えられなくなつて道行く人にお金を下さいと乞ふたのだ、が誰一人此の憐むべきデックに恵まんとするものはなく、中にはデックに向つて「怠け者奴、働け」と謂つて、甚だしきに至つては一顧も興へないで行き過ぎるものさへあるのだでデックは

『あゝ私も働きたい！』と謂つて居た

お臺所

斯くして居る内に憐れなるデックは身體疲勞して最早や一步も進む能はず、空しく彼は兎ある立派な家の戸口に坐して我が故里の之よりも優る事數等なるを思つて居た、此時家の料理人は食事の仕度をして居たがデックの戸口に坐せるを見て「此の小さい乞食、何にしに其處に居るのだ、早く行け、行かねば熱い湯をぶつかけるぞ、そうしたら飛び上るだらふ」とさも意志悪く怒鳴つた、然れども恰もよしフィッツ

I wish I could, wish は願望を現はす。

ワトレンと謂ふ此家の主人が食事をせんと家へ歸つて來て其戸口に居る小僧を見て言葉優しく「御前は其處で何をして居るのか、定めて働らかずして食を求めぬ怠け者であらふな」と尋ねた、するとデックは「否私は仕事さへあれば働きたいと思つて居りますが此ロンドンで自分の知邊と謂ふ人は一人もなく其上長い間物を食べずに居るのです」と答へた

之を聞いて主人は「夫は氣の毒な事だ、それなら私は何か仕事を與へてやらふから兎に角家へ入りなさい」と云つてデックを中に伴ひ以前の料理人にデックに食事を與へる様に命じ、且何か容易な仕事でもさす様に云ひ付けた

若し此意志の悪い料理人さへ居なければデックにとつては此に留る事は甚だ幸福であらふが料理人は常にデックに「御前は常に私の云ふ様にしなくちやいけないよ、さア火を起せ、灰を取出せ、皿を洗え、庭を

Called out=cried out. I'll=I will の畧字。
poor little fellow 哀れな奴じや。